

---

# ストリートファイター達の合宿生活！

イズナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストリートファイター達の合宿生活！

### 【Nコード】

N5841G

### 【作者名】

イズナ

### 【あらすじ】

ストリートファイターでのお馴染みのリュウを始めとしたメンバーが打倒ベガのために異世界に集まるが…

プロローグ『俺より強い奴に会いに行く!』（前書き）

どうもイズナと申します、ストリートファイターが好きな中学生です！へたっぴながら小説を書かせてもらいます！  
精一杯頑張るのでよろしくお願いします！

今度から前書きは自分の事とかを書きたいと思っています。

プロローグ『俺より強い奴に会いに行く!』

「セイツ！ハアツ！」

柔道着を着た一人の男が大木に自分の拳を打ち付けている、男が殴る度に大木は揺れ、今にもへし折れそうだ。

「セイツ！ハアアア！！！」

一心不乱に殴り続ける、痛みは全く感じていないようだ。

「よし…ハアツ！！！」

男はさつきよりも、拳に力を込めて大木を殴り付けた。

「バキッ！」

乾いた音が響き、大木は豪快にへし折れた。

「フーツ、少し休むか…」

男は木にもたれ、座った。

ここは辺境にある森で、男は修業の一貫として、数ヶ月前から、この森にこもっているのだ。

「みんな、元気だろうか…」

男は呟いた、男が言うみんなとは、かつて、世界に悪名を轟かして

いた秘密結社シャドルーの総帥、ベガを打ち倒すべく集まった同志のことである。

「ぐう」

不意に男の腹が鳴った。

「昼か…飯にするか」

男は朝から修業を始めているので、腹が減るのは当然だ。

男は立ち上がって、木に立て掛けてあった、釣竿をてにとった。

「今日も大漁を目指すか！」

川が近くにあるから、食料には困らない、といっても毎度釣れる訳ではないので、その時は事前に持ってきた缶詰を食べている、川の水はきれいなので水分にも困らないのだ。

「大漁には程遠いな…」

結果は二匹釣れた程度だった、男の腹は到底満たされない。

「仕方ない、缶詰も食うか」

男の食事が始まった、用意しておいた木にマッチで火をつけて、魚を焼いて食べるといふ原始的極まりない食事方だ。

「いつ食っても魚は旨い、塩が欲しいな…」

そんな事をぼやきながら、食事を済ませた。

「よし！再開するか！」

男はいつも頭に巻いている、赤いハチマキを締め直して、気合いをいれ、修業を始めようとしたとき…

「ん？」

上から手紙が落ちてきた…

「手紙？どこからだ？」

と言いながら、男は手紙を読みに取り掛かる。

いきなり手紙をよこしてすまない、私の名はマスター、異世界の創造を司る者だ。

リュウ、君が倒したはずのベガはまだ生きている、ベガは君に負った傷を癒すために、私達の世界に潜伏していて、そこに本拠地を建てるらしい、そこで、君に私達の世界にきてほしいのだが、強制はしたくない、来てくれるというのなら、心に行くと唱えてくれ。この鍵は寮の扉を開けるときに使うてくれ。

と、長々書かれた手紙に鍵が入れられていた。

リュウ

「ベガが生きている？そんなことが…」

かつて、リュウが自分の拳で倒したはずのベガが生きているなんて考えられないことだ。

リュウ

「フツ、こんな所にいてる場合じゃないな…」

リュウは悟ったのか、すぐに決心をした。

リュウ

「待っている！ベガ！」

勢いよく天に拳を突き上げた。

リュウ

「俺は俺より強い奴に会いにくっ！マスター、俺を異世界に導い

てくれ！」

そう言うと、リュウの姿は閃光とともにきえていった…

ブローグ『俺より強い奴に会いに行く!』(後書き)

どこか間違ってる部分がありましたら、感想に書いてください!  
そのついでに評価もくれると嬉しいです!

## プロローグ2 『再開』 (前書き)

前から犬トイプードルを買っているのですが、なかなか懐いてくれません。子犬の頃嫌がらせしたのか、母さんに聞いたら、「あんたは犬年やからや」って言われたんですけど、え？って思いました。

犬年論は純度100%有り得ないと思います、たぶん、後者かと…

## プロローグ2 『再開』

リュウ

「ここはどこだ？」

リュウが先ほどいた森とあまり変わらない所だ、違う所はリュウの後に寮らしき建物があることだ。

リュウ

「なんだこの建物は？これがマスターが手紙に書いてた寮なのか？」

リュウは一瞬戸惑ったが、マスターがよこした鍵で扉を開けることにした。

「ガチャ」

扉が開いた。

リュウ

「よし、入るか」

入るなり真っ暗だった部屋に明かりがついた。

リュウ

「自動か？便利だな」

寮の中は広々としていて、キッチン、風呂、テレビなど、生活には困らないような設備が施されている。二階にはこれからくるであろうメンバーの部屋も用意されていた。

リュウ

「俺一人か…、マスターが来るまで寝るか」

部屋に置いてあるソファーに横になり、眠りについた。

「誰なんだろうなマスターってよ」

「そうね、謎が多いわシャドルーが、いや、ベガが生きてるって証拠もないしね」

リュウが寝ている間に二人の男女がやってきたのだ、男は金髪でリュウと似た赤い柔道着を着ている、女はチャイナ服を着ていて、第一印象に脚線美が目立つ。

「私達だけかしら？こんなに広いのに…」

「いいじゃねえか、二人で住むには良い広さだぜ？」

「なに言ってるのよ！もう、」

「まあとにかく座ろっぜ」

「そうね、座りましょうか」

二人はリュウの寝ているソファーに座った。

「ん？なんかゴツゴツしてんな、このソファー」

「まって！リュウよ！」

男は跳び上がった。

「リュウじゃねえか！コイツ、完全に気配を消してねてやる……」

「どうしようかしら？」

「起こそうぜ、話も聞きたいしな」

起こしに二人は取り掛かった。

「オイ、起きろ！リュウ！」

体を揺さ振るがなかなか起きない。

「忘れてた…コイツは一度寝たら、自分が起きるまでなかなか起きねえんだよな」

「私じゃあ無理ね…」

「それに、無理矢理起こしたら、後が酷いからな」

「どういふことなの？」

「寝起きが悪いのさ」

「なるほどね」

二人がリュウを起こせず困っていると、リュウはのそりとソファーから起き上がった。

リュウ

「何だ？騒がしい…」

「おお！リュウ起きたか！」

リュウ

「ケン！それに、チュンリー！」

ケンと呼ばれた男は、リュウの昔の稽古仲間であり、親友でもある、出身はアメリカであり、打倒ベガのためにリュウ達と協力した人物である。

チュン

「リュウ、なぜあなたがここに？」

リュウ

「目的は一つさ、打倒ベガだっ！チュンリー、お前もそうだろ？」

チュン

「無論、そのつもりだけど…」

リュウ

「だけど、何だ？」

チュン

「またあなた達に協力してもらわないといけないのよ……」

リュウ

「気にするな、俺は俺より強い奴と闘いたただけだ、その対象がベガなだけさ」

ケン

「ホントにバトルマニアだな、お前は」

リュウ

「ふっ、そうかもな」

ケン（心の中）

「そうかもなじゃねーだろ、まったく……」

チュンリーは過去、ベガに父を殺されてから、打倒ベガのためにインターポール（麻薬調査管）になり、一度は倒したものの今回の件でベガが復活したことを知ってしまう。

リュウ

「とにかく良かった、再び会えて！」

チュン

「そうね、本当によかったわ！」

ケン

「全くだな！」

三人が再開の喜びに浸っていると、玄関が開いた。

リユウ

「ん？」

ケン

「おまえ達は!？」

## プロローグ2『再開』（後書き）

感想アンド評価が一件もないんでよろしくおねがいシマス！駆け出しだから、仕方ないとは思いますが…

### プロローグ3 『マスター登場』（前書き）

ストリートファイター2を知っている人はわかると思うんですけど、ブランカが居ないんですよ、理由は喋らせにくいんですよ、野生児ですしね、そのかわりにさくらがリュウ達と寮で暮らすことになります。

この話は、スト2のメンバーでベガを倒したもののベガが復活した、という設定です。

### プロローグ3 『マスター登場』

玄関の扉が開くなり、一人の少女が走って来た。

「リュウさーんっ!!」

少女はリュウに思い切り抱き着いた。

リュウ

「な、何だ?いきなり!？」

「また、一緒に戦えるね!」

リュウは抱き着いてる少女を引き離し、顔を見た。

リュウ

「さくら!?!なぜ君がここに?」

さくら

「マスターさんって言う人から手紙が来たんだよ」

チュン

「あなたもなの?」

さくら

「うん、それにしても皆に会えて嬉しいよ!」

ケン

「ああ、違げえねえ」

リュウ

「さくら、君一人か？」

さくら

「違うよ、もう少しで来ると思っただけど…」

「ドオン！」

ケン

「なんだあ？」

いきなり玄関の扉が吹き飛んで、無惨にも壊れてしまったのだ。

チユン

「誰なの!？」

さくら

「来たみたいだね…」

「ガハハハハッ！脆いわ！このドアは！」

「まったく、あなたっていう人は…」

「後で、直しておけよ」

「いやあ、愉快でござすな！」

扉を壊したのは、筋肉質な大男だ。

さくら

「遅いよ！みんな！」

「あなたが走るからですよ」

さくら

「ごめんね！」

壊した扉からゾロゾロと人が入って来た。

リュウ

「みんな、久しいな」

ケン

「ホントだな！同窓会さながらだな！」

先ほど入ってきた五人を紹介しよう。

少女の名前は春日野さくら、リュウの戦う姿に憧れて自分もストーリートファイターになったのだ、現在は中学二年生。

次は扉から入ってきた順に紹介しよう。

大男はザンギエフ。鍛えぬかれた肉体を持つプロレスラー、要請さえあれば祖国のために世界中を奔走する、愛国心の持ち主。

ダルシム。ヨガの奥義を会得した、心優しきインドの僧侶。

ガイル。アメリカ空軍にいた元軍人。ベガに同じ部隊にいた親友を殺され、家族を捨てて復讐の鬼と化していた。

最後に、エドモンド本田。紅の隈取がトレードマークの大関、相撲をどうにか世界中に広めようと日々思案中。

この五人も打倒ベガにかつて加担していた。

チユン

「これでみんな揃ったわよね？」

本田

「そつみたいごわすな！」

ザンギエフ

「しかし、マスターと言う奴に会ったのか？」

先に寮に来ていたリュウ達に質問する。

リュウ

「いやまだだ、だが、何か強い気が近づいてきている」

ガイル

「ほう、感じるか、鍛練を怠って無いようだなリュウ！」

リュウ

「ガイル、お前もな！以前よりも確実に強くなっているようだな！」

ダルシム

「ここで、闘わないでくださいよ」

リュウ

「ああ、我慢するさ」

ケン

「来る！来るぜ！」

ケンは何者かの気を感じ取った。

さくら

「速い！」

「待たせて済まない……」

寮の中に人が急に現れた。

さくら

「あれ？玄関開けようと思ったのに……」

「それは重畳、もう一回入り直すか……」

リュウ

「お前は？」

「私はマスター、君達に手紙をよこした者だ」

ガイル

「目的は何だ？」

マスター

「手紙に書いてあったはずだが？」

ガイル

「そうだったな」

マスター

「みんな、座ってくれ、話が長くなりそうだから」

マスターはゆっくりと、話始めた。チュン

「これでみんな揃ったわよね？」

本田

「そうみたいごわすな！」

ザンギエフ

「しかし、マスターと言う奴に会ったのか？」

先に寮に来ていたリュウ達に質問する。

リュウ

「いやまだだ、だが、何か強い気が近づいてきている」

ガイル

「ほう、感じるか、鍛練を怠って無いようだなリュウ！」

リュウ

「ガイル、お前もな！以前よりも確実に強くなっているようだな！」

ダルシム

「ここで、闘わないでくださいよ」

リュウ

「ああ、我慢するさ」

ケン

「来る！来るぜ！」

ケンは何者かの気を感じ取った。

さくら

「速い！」

「待たせて済まない……」

寮の中に人が急に現れた。

さくら

「あれ？玄関開けようと思ったのに……」

「それは重畳、もう一回入り直すか……」

リュウ

「お前は？」

「私はマスター、君達に手紙をよこした者だ」

ガイル

「目的は何だ？」

マスター

「手紙に書いてあったはずだが？」

ガイル

「そうだったな」

マスター

「みんな、座ってくれ、長くなりそうだからな」

マスターはみんな話始めた。

プロローグ3 『マスター登場』 (後書き)

プロローグ長いですね…、とにかく！感想だけでも下さいっ！

## プロローグ4『キルバーン』（前書き）

また犬の話なんです、トイプードルは天然パーマなんですよね、それが災いして伸びてくると小熊みたいになるんですよ！ホントに、ただど風呂に入ったら小熊というよりミイラみたいに変貌します。ギャップがすごいですね犬って

## プロローグ4『キルバーン』

マスター

「まず、ここに来てくれた事を心から感謝する」

本田

「月並でござすな」

ケン

「ハハア、確かにな」

マスター

「そこ、やかましいぞ」

マスターは話を続けた。

マスター

「手紙にも書いてあったと思うが、君達が過去倒した秘密結社シャドルーの総帥ベガが生き返った」

ダルシム

「リュウさんが確かに倒したはずでしたが？ねえリュウさん？」

リュウ

「ああ、確かに俺の拳が奴の胸を貫いた、今でも覚えてるさ、奴の断末魔の叫びを…」

ザンギエフ

「俺もたしかに見たぜ！だが、俺のスクリューパイルドライバーで

とどめをさしたかったがな」

ガイル

「後の祭りだ、ザンギエフ」

ザンギエフ

「ガハハハッ！そうだな、スマン、スマン！」

豪快に笑ってリュウに謝る。

ケン（心の中）

「謝罪の気持ちがい%もこもってねえよ…」

チュンリーがマスターに真剣な表情で質問した。

チュン

「当然、自分で生き返ったわけじゃないでしょ？」

マスター

「ああ、ベガのサイコパワーをもってもしてもそれは出来ん」

本田

「となると、生き返ったってことは、誰かの意図的な行為でこわすな」

ガイル

「ほう、たまにはまともな事を言うのではないか」

本田

「わしをなめたらイカンでこわすよ」

リュウ

「で、本当のところどうなんだマスター、誰が何の為にベガを復活させたかというのは？」

リュウは話を戻した。

マスター

「簡潔に言っぞ、ベガを復活させたのは私の弟だ、何の為かは今の所わからん」

さくら

「ええー！？マスターさんの弟が！？」

マスター

「ああ、真だ」

リュウ

「マスターが創造を司るなら、差し詰め弟は破壊を司る、と言った所か」

マスター

「違うない」

ケン

「アンタ、兄貴だろ？何で止めねえんだ？」

ケンがマスターを窘めるように言った。

マスター

「はじめは止めたが、皮肉にも純粹な力では弟の方が遙かに上なんだ、おかげで殺されかけたさ」

ガイル

「弟の名前は何て言うんだ？」

マスター

「キルバーンだ」

チユン

「キル…不吉な名前ね」

ケン

「だったら今からそのバカ弟をぶん殴り行こうぜ！」

ケンは奮い立ったように言った。

マスター

「それが出来れば重畳だが、居場所がなかなか掴めんだ、だからこうして今日、寮を創ったのだがな」

ザンギエフ

「今日？突貫工事も良いところだぜ」

ダルシム

「失礼ですよ、ザンギエフさん」

ダルシムはザンギエフに注意を促した。

ザンギエフ

「だけどよ、今日だぜ？信じられるか？」

ダルシム

「うう…確かに変ですね」

マスター

「そう思うのが自然さ、君達に外で寝かせる訳にもいかないから私の創造の力で創らせてもらった、なかなかの出来栄えだろ？」

チュン

「たしかによく出来てるわ、でも寮が日本の家みたいだわ、畳もあるし」

リュウ

「俺は好きだがな」

本田

「わしもでござす！」

リュウと本田は日本出身だからここが居心地がいいのだろう。

マスター

「私の好みだ、この世界のベースは日本だからな」

ガイル

「アンタがこの世界を創ったのか？」

マスター

「ああ、時間はかかったがな」

さくら

「凄いね！」

ケン

「スケールが違い過ぎらあ」

リュウ

「これから、俺たちはどうすればいいのだ？」

マスター

「今日から、君達にはここで暮らしてもらって、いろいろ設備も整えたが不備があったら言ってくれ。月ごとに金を渡すからよく考えて使ってくれ」

本田

「マスターはこれからどうするでございすか？」

マスター

「キルバーンとベガを捜す」

リュウ

「俺も行かせてくれないか？」

マスター

「すまないが無理だ」

リュウ

「そうか、仕方ないな」

残念そうに言った。

マスター

「それでは私は行く、たまに来るからな」

チュン

「ええ、見つけたら連絡してね」

マスター

「あ、これを渡しておく」

マスターはチュンリーに何かが入った封筒を手渡した。

チュンリー

「なにかしら？」

マスター

「後で見てください、それじゃあな」

そう言い残すと閃光と共に消えていった。

ケン

「行っちゃったか」

ダルシム

「封筒の中味はなんですか？」

チュンリーは封筒を開けてみた。

チュン

「お金だわ、二十万あるわ」

ケン

「これで一ヶ月過ごせっただか？」

リュウ

「充分さ」

ガイル

「食費とかにあてるべきだな」

本田

「わしらは良く食べるでござすからな！」

ザンギエフ

「ガハハハッ！ 違ういな！」

ダルシム

「私はあまり食べませんがね」

こうしてストリートファイターズ達の合宿生活が始まった…  
ダルシム

「封筒の中味はなんですか？」

チュンリーは封筒を開けてみた。

チュン

「お金だわ、二十万あるわ」

ケン

「これで一ヶ月過ごせってか？」

リュウ

「充分さ」

ガイル

「食費とかにあてるべきだな」

本田

「わしらは良く食べるでごわすからな！」

ザンギエフ

「ガハハハッ！ 違いがないな！」

ダルシム

「私はあまり食べませんがね」

こうしてストリートファイターズ達の合宿生活が始まった…

プロローグ4『キルバーン』（後書き）

感 부탁드립니다！そして言ばして下さい！待ってます！

## 寮内見学（前書き）

これからは読み切りになります！たまに続編があったりもしますの  
でよろしくお願いします。

## 寮内見学

一同はテーブルを囲むようにしてソファに座っていた、だが一人だけ立っている女性がいた。

チュン

「この会議は私が仕切らせてもらうわね」

一同

「異議なし！」

チュン

「まず、マスターについて皆に聞きたいわ」

ガイル

「マスターの何をだ？」

チュン

「信用性よ」

ケン

「さすが刑事さんだ、何でもうたぐってかかるな」

ケンはからかう様ように言った。

チュン

「当たり前よ、何でもかんでも信じてちゃ、痛い目を見るのよ」

ケン

「ま、そうだな！」

わかったような解らないような中途半端な返事をした。

ダルシム

「私もマスターさんを完全に信用したわけではありませんが…」

チュン

「ね？」

チュンはケンに向かってウィンクをした。

ケン

「何が、ね？だ！」

リュウ

「俺は信じる！」

突然のリュウの発言に皆はリュウの方を向いた。

さくら

「リュウさん…」

リュウ

「こつやって戦友にも会えたし、それでいいだろう、それに奴が嘘をつくとも思えない」

静かに重く発した言葉に皆は説き伏せられた。

本田

「そつでござすな！」

チュン

「まあ…あなたが言うのだったら…」

チュンリーもマスターを信じることにしたのだ。

ケン

「何で俺が言ったときは反論したのに、リュウの言ったときはしねえんだよ！」

チュン

「リュウは説得力があるのよ！」

ダルシム

「確かに」

ケン

「へーへーそうかい、よかったなリュウ」

リュウ

「俺は思ったことを言ったまでだ」

静かに答えた。

ケン（心の中）

「これだもんなく、コイツは」

ザンギエフ

「マスターのことは一段落ついただろ？これからどうするんだ？」

チュン

「発言するときには手を挙げてちょうだいな」

さくら

「学校じゃないよ、リーさん……」

ガイル

「まず、この寮を見学するべきだろう」

リュウ

「そつだな」

さくら

「そつと決まったら、行こつよー！」

ガイルの提案で見学が決まった。

本田

「まずは二階にいくでございませう！」

一同は階段を登って、二階に足を運んだ。

ダルシム

「うーん、扉がたくさんありますね。」

ザンギエフ

「名前がかいてあるぞ。」

チユン

「なにになに…、一号室リユウだって。」

そこには、全員分の部屋が用意されており、扉の札に番号と名前が書かれていた。

ケン

「それぞれの部屋に入ってみようぜ！」

そういつと皆はそれぞれの部屋に入っていった。

リュウ

「広いな…」

リュウは肩にかけていたバッグをおろし、部屋に置いてあった家具に目を傾けた。

リュウ

「テレビ、ベッド、タンス…俺には不要なものばかりだな、どかすか」

そう言つと同時に、次々と部屋の家具を寮の外に出し始めた。

リュウ

「ふう、これでいいか」

部屋に置いてあった家具は全て外に出され、かなり殺風景な部屋になつてしまった。

リュウ

「次は、寢床だな」

バッグからリュウ愛用のハンモックを取り出した。

リュウ

「ちょうど引っ掛ける所があるな、あそこに掛けるか」

二カ所の出っ張りにハンモックの先の部分を掛けて、見事ハンモックを部屋に設置出来たのだ。

リュウ

「これでいいだろう、出るか……」

リュウが部屋から出ようとした瞬間……

ケン

「いい部屋じゃねえか、お前の所も……」

勢い良く扉が開き、ケンが部屋に入って来た。

リュウ

「ああ、俺には勿体ないくらいだ」

ケン

「おい、家具はどこだ？」

リュウ

「不要だから、退かしたんだが…」

ケン

「何やってんだよ！それに部屋にハンモックってシユールすぎるだろ！」

リュウ

「そうか？俺は落ち着くんだが」

ケン

「まあ、いいけどよ、お前の部屋なんだし」

呆れたようにリュウに言った。

チュン

「ケン！リュウ！遅いわよ！」

一階からチユンリーの呼ぶ声がした。

ケン

「おっと、お呼びみたいだぜ」

リュウ

「行こうか」

二人は皆を待たせないように急いで一階に向かった。

さくら

「リュウさん遅いよ」

リュウ

「すまない」

ダルシム

「次は地下ですね」

ケン

「地下あ？そんなもん有ったか？」

ガイル

「さっきお前達を待ってる時に、本田が見つけてな」

リュウ

「どこにあるんだ？」

チユン

「玄関の横の階段よ、今まで気付かなかったわ」

本田

「わしもたまたま見つけたでござすよ」

さくら

「行こうよー！」

地下へと続く階段をおりていった。

ケン

「暗れえな」

明かりはついておらず、何の部屋が全くわからない。

ダルシム

「それなら私にお任せよ、ヨガファイア！」

ダルシムは口から炎を吐き出し、辺りを明るくした。

ザンギエフ

「スイッチあつたぞ」

「カチツ」

ザンギエフが電気のスイッチをつけた。

チュン

「ありがとう、ダルシムさん」

ダルシム

「お礼には及びませんよ」

リュウ

「ん？」

明かりがついた部屋には、体を鍛える器具が置かれており、いわゆるトレーニングルームだ、奥の強化ガラスにおおわれた部屋は射撃室だ。

ガイル

「ほう、トレーニングルームか、気が利いてるな」

チユン

「射撃室もあるわ!」

本田

「射撃室なんかだれがつかうでござるか?」

チユン

「私よ」

さくら

「凄いね!」

本田

「物騒でござるな」

リュウ

「地下はこれだけか、俺は上がってるぞ」

リュウは皆に背を向け階段を上がった。

ケン

「あいつはこーいっつのは興味ないからな」

ザンギエフ

「変な奴だな」

ダルシム

「我々も上がりましょうか」

さくら

「そうだね!」

リビングに集まった一同は外に出ることにした。

ガイル

「四方八方、森だな」

リュウ

「俺は好きだがな」

さくら

「寮の隣に、何かあるよ」

さくらは木で出来た、倉を指さした。

本田

「これは、倉庫でござすな」

ケン

「何から何まで用意がいいこった」

ダルシム

「それに越した事はないですよ」

チユン

「あら！誰？外に家具を捨てたのは！」

リュウが先程、外に放りだした家具を発見されたのだ。

ケン

「誰だろうな、こんなバカな事をする奴は？」

横目でリュウを見た。

リュウ

「うう…ケンの奴」

チュン

「リュウ、あなた知らない？」

リュウ

「いや、知らないが…」

家具の事は黙っておくつもりだ。

リュウ（心の中）

「後で片付けるか…」

こうして一同は寮の見学を終え、寮の中に戻った。

ケン

「提案があるんだがよ」

さくら

「何？ケンさん？」

ケン

「パーティするのは、どうだ？」

ケンの口から、パーティ案が飛び出した。

## 寮内見学（後書き）

文章がおかしかったら、指摘してください！感想も待ってます！

## お買い物（前書き）

更新が遅くなってしまいましたすみません！以後、早く更新できるように精進します。

## お買い物

リユウ

「パーティ？祭の事か？」

ダルシム

「違いますよ、儀式ですよ」

本田

「違うでござす！大食い大会でござすよ！」

ケン

「おめえら！わざとか！？パーティは皆で、飯食ったりするんだよ  
！」

ケンは必死に説明する。

さくら

「いいね！やろつよ！」

ガイル

「するとしても、食材はどつするん？」

リュウ

「大丈夫だ、寮から少し離れた所から、大勢の人の気を感じる、多分、町があると思うが」

チユン

「行ってみましようよ」

ザンギエフ

「そうと決まればすぐいくぞー！」

一同は寮の外にでた。

ケン

「さて、どっちに歩き出せばいいんだ？」

さくら

「私も、気を感じるんだけど、流石に位置まではわからないよ」

ガイル

「俺もだ」

本田

「リュウ殿はわかるでござすか？」

リュウ

「ああ、ここから、西の方角に歩けばいい」

ケン

「こいつは、高性能レーダーだからな、漁でも役にたつぜ！」

ケンはリュウの肩をバンバン叩いた。

ダルシム

「リュウさん、お願い出来ますか？」

リュウ

「ああ、ついてきてくれ」

リュウは町の方へと、歩き出した。

ザンギエフ

「ちゃんと道は作ってあるんだな」

チュン

「マスターがやってくれたんだと思うわ」

ケン

「だらうな」

さくら

「遠足みたいで楽しいね！」

ガイル

「そう思うのも悪くないな」

楽しく一同が喋っていると、リュウは立ち止まった。

リュウ

「町が見えたぞ」

目の前に、人、建物、緑が広がった。

チュン

「良い町ね！」

ダルシム

「活気がありますね」

ザンギエフ

「買い物はどうする？」

ケン

「食材班とパーティ用具班に分けるっていつのはどうだ？」

リュウ

「俺は構わないが」

さくら

「私も！」

ダルシム

「それじゃあ、分けましょうか！」

それからメンバー分けた結果、食材班はリュウ、ケン、ザンギエフ、さくら、本田、パーティ用具班は残りのメンバーだ。

リュウ

「それじゃあ、行こうか」

一同  
「おう！」

二つの班に分かれての行動が始まった。

食材班

ケン

「しかし、店はどこにあるんだ？」

ザンギエフ

「有るのは有るのだが、食材が置いてある店は無いな」

さくら

「リュウさん、どうする？」

リュウ

「歩いて探すしかないだろう」

昼なので、人は多く、なかなか目的の店が見つからない。

ケン

「まったく、見渡すかぎり人だな」

ザンギエフ

「にぎやかでいいじゃねえか」

いきなり、さくらは何かを見つけた様で興奮したように叫んだ。

さくら

「あつたよ!」

リュウ

「何がだ?」

さくら

「スーパーだよ!」

さくらはリュウ達から離れた所にある、大きな建物を指差した。

本田

「さくら殿、お手柄でござすな!」

ケン

「しかしでけえくな、こつから見てもわかるぜ！」

リュウ

「…スーパーとは何だ？」

一同

「え？」

一同の喜びに水を差す一言が飛び出した。

本田

「リュウ殿、知らないのをごわすか？ わしでも知ってるのをごわすよ？」

さくら

「お肉とかお魚がいっっぱい売ってるんだよ！」

手を広げて、ジェスチャーもおりいれて説明する。

リュウ

「そいつは重畳だな」

ケン

「お前は世の中のことを疎過ぎるんだよ」

ザンギエフ

「ガハハハッ！良いではないか！」

一同はスーパーへと、歩を進めた。

パーティ用具班

チユン

「意外と早く見つかったわね」

ガイル

「ああ、軍資金はいくらだ？」

ダルシム

「三千元です」

三人はリュウ達と分かれた後、リュウ達とは違って、すぐに目的の店を見つけたのだ。

ガイル

「しかし便利だな、全て百円とはな」

ダルシム

「品揃えも豊富ですしね」

チュン

「まずは…お皿ね」

パーティ用具を探していた。

ガイル

「皿とコップを見つけたぞ」

チュン

「ありがとう、後は何が要るかしら？」

ダルシム

「飲み物やお菓子がいるかと…」

チュン

「すっかり忘れてたわ！ありがとうダルシムさん！」

そんな調子で、サクサクと必要な物をガイルが持っているカゴに入れていった。

食材班

リュウ

「でかいな…」

リュウ達は、巨大スーパーの前に立っていた。

さくら

「入ろうよ」

ケン

「そうだな！」

スーパーに入ると、いろんな店がならんでおり、多くの客で賑わっていた。

ザンギエフ

「ところで、予算はいくらだ？」

リュウ

「チyunリーに三千円もらったが」

リュウはポケットに入っている札を数えて言った。

本田

「少ないでごわすな…」

ケン

「三千円じゃロクなもん買えねえぜ、チュンリーの奴、ケチりやが  
つて！」

さくら

「パーティって言ったら、お肉だよね！」

リュウ

「肉屋なら、そこにあるんだが」

リュウは肉屋がある方向を指さした。

ザンギエフ

「では、行こうか」

リュウ達は肉屋に行った。

肉屋

「いらっしやい！」

ケン

「どれどれ…ステーキ一枚、三百円!？」

本田

「本当なら安いですが、この予算では、高いですわすな」

ケンは考えた、どうすれば肉を安く手に入れられるかを…

ケン

「これしかねえな！」

ザンギエフ

「何がだ？」

ケン

「高けりや、値切るまでよ！」

さくら

「わたしもやりたい！」

ケン

「じゃあ、さくらちゃんと交渉してくるぜ！」

二人は肉屋の店員に値切りだした。

## お買い物（後書き）

この前リュウの「昇龍拳」を真似たら足を怪我しました。何でだ  
る？

## 準備（前書き）

最近、巷で流行っているPSPをやっています。

ゲームは出来るわ、音楽は聞けるわ、画像は見れるわ、動画は見れるわで、もう、僕のケータイが、かなり肩身の狭い思いをしています。

## 準備

さくら

「店員さん」

さくらは厨房に向かって店員を呼んだ。

店員

「はいはい、らっしゃい！何にしましょうか？」

ケン

「あのステーキを買いとえんだけど、予算が足りねえんだよ」

さくら

「安くしてくれませんか？」

店員は困ったような顔をした。

店員

「こっちも商売なんですぜ、それは、ちょっと…」

ケン

「頼むぜ、買ってこねえと、嫁に怒られるんだよね」

さくら（小声）

「嫁って、リーさんですか！？」

ケン（小声）

「嘘もほーべんって言うだろ？」

店員

「兄ちゃん、嫁さんがいんのか？」

ケン

「ああ、だから頼むよ〜」

店員

「わかった！それじゃあ、コレを…」

さくら

「え？」

5分後…

ケン

「何でこうなるんだよ…」

ケンとさくらは店員が用意した、店の服を来ていた。

店員

「さすがに、タダにはできないから、働いてもらおうと思ってな」

さくら

「面白そうだね！」

ケン

「墓穴を掘ったか…」

ケンががっくりしていると、リュウ達が痺れを切らしてやってきた。

リュウ

「なんだ？その姿は？」

ケンとさくらはリュウ達に説明した。

ザンギエフ

「それじゃあ、お前達は、ここで少しの間働いて、俺達は他の食材を買ってくる、どうだ？」

さくら

「うん！終わったら、迎えに来てよ」

ケン

「まったく、しゃあねえな、さくらちゃん行くぞ！」

ケンはさくら共に、店の手伝いをしに行った。

本田

「それじゃあ、行くでござるか！」

リュウ

「ああ、行くか」

チュン

「ただいま」

ガイル

「まだ帰ってないのか、食材班は…」

ダルシム

「私たちは先に、用意しますかね」

パーティ用具班は先に、用意することにした。

ガイル

「で、何をすればいいのだ？」

チュン

「あなたとダルシムさんは、寮の飾り付けをお願いしたいわ」

ダルシム

「チュンリーさんは？」

チュン

「私はこの寮を掃除するわ、なんだか、ホコリっぽいしね」

ガイル

「了解した、やるぞ、ダルシム」

ダルシム

「ええ！」

リユウ達は食材の買い物を終えて、先程の精肉屋に戻っていた。

ケン

「お買い上げありがとうございますー！」

さくら

「また来てねー！」

ケンとさくらは主に、客寄せをしていた。

リュウ

「二人とも、板についてるじゃないか」

ケン

「嬉しかねえよ、大声出し過ぎて、喉が痛てえぜ」

さくら

「でも、楽しいよー！」

店員

「兄ちゃん、姉ちゃん、サボっちゃだめだよおー！」

ケンはニヤリと笑うと、言った。

ケン

「約束の時間は過ぎたぜ！」

店員

「もう、そんな時間か、しかたねえ！この肉、持ってきな！」

店員は少し残念そうな顔をして、さくらに人数分の肉を渡した。

さくら

「ありがとう！また来るね！」

店員

「ああ、また売り上げアップに貢献してくれよ！」

リュウ達は、肉屋の店員に別れを告げ、寮に戻った。

チュン

「ふう、ピッカピカね！あなた達はどうか？」

ダルシム

「先程終わりましたよ」

ガイル

「結構、重労働だったな」

「ガチャ」

扉が開いた。

リュウ

「今、帰った」

チュン

「あら、お帰りなさい」

ケン

「へえ、飾り付けしたのかよ」

ダルシム

「私とガイルさんでしました、どうです？」

さくら

「すごく綺麗だよ!!」

ガイル

「飾りつけた甲斐があったな」

チュン

「食材は？」

ザンギエフ

「これだ！」

ザンギエフは買い物袋をチュンリーに渡した。

チュン

「…うん！ちゃんと買ったとおりね！」

ケン

「当たり前だぜ！初めてのおつかいじゃないんだから」

本田

「買ってきたのは、いいのですが、誰が作るでござるか？」

チュン

「もちろん、私よ！」

さくら

「リーさん、料理してくれるんですか？」

チュン

「ええ、特に中華料理わね！誰か、手伝ってくれないかしら？」

さくら

「私、手伝いたいな」

ケン

「おれも手伝うぜ！」

ダルシム

「私も手伝いましょう」

チュン

「じゃあ、四人で作るわ！他の人は待っててね！」

チュンとお手伝い班はキッチンに向かった。

ザンギエフ

「リュウ、お前さんは、料理出来ないのか？」

リュウ

「握り飯なら作れるが」

ザンギエフ

「…そうか」

リュウ

「ザンギエフはどうなんだ?」

ザンギエフ

「作れるが、俺がいたら、キッチンが狭くなるからな!」

本田

「わしもでござす!」

ガイル

「料理出来るのか?」

本田

「チャンコ鍋なら出来るでござす!」

ガイル

「やはり…」

リュウ達は、残ったメンバーと楽しく会話をした。

1時間後

チュン

「お待たせ」

チュンリーと手伝い班によって、出来た料理を次々にテーブルに並べられていった。

ガイル

「上手そうだな」

ケン

「そりゃ、この天才料理人ケンさんがキッチンにいたんだからな！」

テーブルを、チュンリーが作った、餃子、炒飯、肉まん、ケンが作った、カルボナーラ、ダルシムとさくらが作った、お握りがテーブルを彩った。

ザンギエフ

「チュンリーとケンはわかるが、さくらとダルシム、何だそれは？」

さくら

「リュウさんが、お握り好きだから、作ってみたんだよ！」

ダルシム

「中味は食べてからの楽しみです」

ケン

「リュウ、よかったな」

リュウ

「嬉しいんだが、中味が気になる……」

チュン

「さあ！みんな、椅子に座って！」

全員テーブルに着いた。

さくら

「それじゃーみんな！」

みんな  
「いただきます！」

## 準備（後書き）

みなさん、流行りの豚インフルエンザには、気をつけてください！

飲めや歌えや！（前書き）

ケン「パーティーって言ったったら、このケンさんだな！」

さくら「なんでえ？」

ケン「歌は歌えるし、かつこいいし、後…かつこいいし」

リュウ「何を言っているんだ、お前は、歌なら俺だって、歌えるぞ」

さくら「ほんとー!？」

リュウ「演歌ならな」

ケン「……………」

飲めや歌えや！

さくらの声と共に、パーティ…と、言うよりも、ストリートファイターズの初めての晩餐が始まった。

ガイル

「肉は無いのか？」

チュン

「あら、あれは、明日の晩御飯にする予定よ」

ガイル

「そ、そうか」

ガイルは実は肉が大好物なのだ。

ケン

「肉より、俺のカルボナーラを食え！うまいぞ」

リュウ（小声）

「本田、なぜ、さくらは俺をずっと見ているのだ？」

さくらは先程からリュウをじっと見つめていたのだ。

本田

「リュウ殿が、さくら殿の作ったお握りを食べないか気になるからでござすよ」

リュウ

「成る程な、食べてみるか…」

リュウはさくらとダルシムが作った、お握りを手にとって食べてみた。

本田

「どうでしうわすか？」

リュウ

「ん？カレーの味がするよ…」

さくらが、リュウの席の隣にやってきて、お握りについて説明をした。

さくら

「カレーを入れたのは、ダルシムさんの提案だよ！ねえ！？」

さくらはダルシムの方を向いた。

ダルシム

「ええ、リュウさん、どうです？お味のほうは？」

リュウ

「…、なかなか美味だ」

それを聞いた途端、パアッとさくらの顔は明るくなった。

さくら

「よかったあ！」

各自で盛り上がっていると、ケンは何かが入った、大きな段ボールをもってきた。

ザンギエフ

「なんだそれは？」

ケン

「パーティに色気が無いと思ってな！肉屋の兄ちゃんに貰った酒だ！」

ケンは酒瓶が割れないように、ゆっくり床に置いた。

チュン

「今度、お礼言わなくっちゃね！」

ガイル

「ほう、酒か、ちょうど飲みたいと思ってた所だ」

ケン

「いいねえ、今夜は潰れるまで飲むぜ！」

それから、ケンたちは、酒を飲んだり、昔話に花を咲かせたりと楽しんだ。

それから、2時間後…

本田

「ぐ〜…」

ザンギエフ

「ぐぐ、この、ザンギエフ様に敵う、ガチムチボディはいない……」

ケン

「ぐぐ、イライザ、違うんだ！この娘は……」

リュウ以外のメンバーはみんな、泥酔して寝ていた、さくらはケン達に飲まされたからだ。

リュウ

「……………」

リュウは皆を起こさないように、静かに寮の外に出た。

リュウ

「良い風だ……」

リュウは酒を飲んだので、風にあたりに来たのだ。

リュウ

「明日からは、また修行だな……」

夜空に浮かぶ月を眺めていた。

眺めていると、寮のドアが開いて、誰かが、リュウの方へと歩いて来た。

リュウ

「チュンリーか」

リュウは振り向かず、言った。

チュン

「さすがね、脅かそうって思ってたのに」

リュウ

「酔いがさめたのか？」

チュン

「そんな所かしら、良い風ね…」

リュウと同じ事を、呟いた。

リュウ

「そうだな…」

二人は、座った。

チュン

「あなたは、明日からどうするの？」

リュウ

「修行さ」

さらりと答えた。

チュン

「あなたらしいわ、でも、門限は8時よー」

リュウ

「門限？」

リュウは顔をしかめて、聞いた。

チュン

「明日からは、みんな好きな事をしてもいいけど、朝ごはんや晩御飯はみんなで食べるわよ、出来るだけ、みんなと過ごしたいしね」

リュウ

「わかった、」

リュウはコクリと頷いた。

チュン

「私も寝ようかしら？明日からは急がしね」

リュウ

「なぜだ？」

チュン

「朝ごはんを作ったり、家事をしたいのよ、そういうのに憧れていたいしね」

リュウ

「そうか、俺も寝るか」

二人は立ち上がって、寮へと、もどっていった。

飲めや歌えや！（後書き）

やっと、中間テストが終わりました！長い・苦しい・眠いの三拍子の揃ったテストでした、えっ？結果？ 言えません！

リュウと少年〜一部〜（前書き）

ザンギエフ「見よ！このガチムチぼでいをつ！」

さくら「凄いねえ！」

ザンギエフ「極寒の地で鍛えた、鋼の肉体、誰にも真似出来ん！」

さくら「ボディビルダーになったら？」

ザンギエフ「ふむ…考えておこつ」

## リュウと少年〜一部〜

リュウ達が寮に来てから一週間が立っていた。

一同

「いただきまーす！」

現在は七時半、全員で朝ごはんを食べていた。

さくら

「おいしいね〜」

ザンギエフ

「さくらちゃん、急がないと遅刻するぞ?」

さくら

「ああ!? ホントだ! ありがとう、ザンギエフさん！」

さくらは学生だった為、マスターがさくらを中学校に通わしたのだ。

ダルシム

「急いで食べると、体に悪いですよ」

さくらは頷きながらも、急いで朝ごはんをたいらげて、出ていった。

チュン

「気をつけてねー」

それから、皆も朝ごはんを食べて、各自好きな事をするのだ。

リュウ

「うまかった、行ってくる」

リュウはそう言い残すと、外へと出ていった。

ガイル

「さて、俺達もトレーニングするか」

ガイル、本田、ザンギエフは地下のトレーニングルームにいった。

チュン

「私は、寝ようかしら」

ケン

「俺は、出掛けるか！」

ダルシム

「私は散歩に行つてきます」

そういうと、ダルシムとケンは外へ、チュンリーは自分の部屋に行った。

く 昼 く

リュウは日課の朝の修行を終え、ランニングをしていた。

リュウ

「はっ、はっ、はっ、公園か…少し休んで行くか」

町の中にある、公園のベンチに腰掛けた。

リュウ

「子供が多いな…」

今は昼なので、公園には子供で賑わっている。

「返してよっ！」

「へへっ、取れるなら、取ってみるよ！」

リュウが声のする方へと目をやると、一人の少年が三人の少年達に、嫌がらせをされていた。

「返せったら！」

少年は盗られたものを取り返そうと必死になるが、相手は自分よりも背が高く、なかなか取り返せない。

「しつこいんだよ！」

取り返そうとしている少年を突き飛ばした。

「痛た…、それは僕の大事な物なんだから！返せったら！」

リュウはベンチから立ち上がり、その少年達の方へと歩いていった。

「返せつたら！ ……!?!?」

リュウ

「その辺にしたらどうだ?」

リュウはいじめっ子達の後ろから言った。

「だれだよ、おっさん!」

いじめっ子達は振り向いて言った。

リュウ

「その子の知り合いだ」

「おもしろくねえな!いくぞ!」

いじめっ子達は、リュウが来た事によって、逃げるように帰っていった。

「ありがとう、でも…」

少年は深々と頭を下げたが、顔が暗かった。

リュウ

「どうした?」

「僕の、サッカーボールがあいつらに取られて…」

リュウ

「大事なのか？」

「うん、死んじゃったお兄ちゃんが使ってたボールなんだ」

リュウ

「そうか、なら取り返せばいい、そうだろう？」

「あいつら、僕よりもでかいし、僕は、喧嘩なんてしたことがないし……」

リュウ

「それでいいのか？君は」

「……………」

少年は言い返せなかった。

リュウ

「君がいいならそれでいい、俺は行く」

リュウは少年に背を向け、走り去ろうとした……

「まってー!!」

少年がリュウを呼び止めた。

リュウ

「なんだ？」

「柔道してるんでしょ？おじさん、僕に教えてくれないかな…」

リュウの顔を見ながら言った。

リュウ

「名前は？」

「…ダイ」

リュウはダイの名前を聞くと、ダイの前にしゃがんで言った。

リュウ

「ダイ、俺は人に物を教えるのは好きじゃない、すまないな」

ダイ

「お願い！少しの間でいいんだ！時間が…」

リュウ

「時間が無いのか？」

ダイ

「うん…僕、一週間後に引っ越すんだ…」

リュウは少し考えて言った。

リュウ

「そうか…、俺と共に修行をするか？」

「えっ？いいの!？」

ダイは耳を疑った。

リュウ

「ああ、俺はリュウ、この一週間、共に頑張ろう」

ダイの顔はリュウの言葉によって晴れた。

ダイ

「ありがとう、リュウさん！」

この後、ダイは家族を説き伏せてリュウ達が居る寮で過ごす事になった。

## リュウと少年〜一部〜(後書き)

最近、「YAIBA」って言う、漫画を買いました！面白いです！

リュウと少年〜二部〜（前書き）

「ガチャ」

リュウ「作者！」

作者「ここは出入り禁止だよ!？」

リュウ「そうだったのか、しかし短編の筈だが、長くないか？」

作者「書いてみたら、意外に長くなってね、許してよ」

リュウ「俺はかまわんが、他の連中が怒っていたぞ」

作者「うそ？」

リュウ「ホントだ」

## リュウと少年〜二部〜

ダイ

「ダイって言います！よろしくお願いします！」

さくら

「キヤーツ！可愛いー！」

ガイル

「まさか…、お前の…」

ケン

「それはねえって」

リュウとダイはその後、寮に戻りダイが皆に挨拶をしていた。

ザンギエフ

「ダイ、なぜお前はリュウといるのだ？」

ダイ

「実は…」

ダイはリュウとこれから一週間、修行することを皆に話した。

本田

「そつでござわすか…、わしらも協力したいでござわすが…」

ダイ

「ありがとう、本田さん！でも、リュウさんと一緒に修行するから、いいよ！」

本田

「わかったでござる、頑張るでござるよ！」

ダイ

「ありがとう！」

リュウ

「今日は遅い、明日から始めようか」

ダイ

「うん！」

チュン

「じゃあ、ダイ君の為に今日はごちそうよ！」

夕ご飯をたべ、明日の修行の為、ダイはリュウと同じ部屋で寝るとにした。

ダイ

「リュウさん」

リュウ

「なんだ？」

ここはリュウの部屋、リュウはハンモックで寝てなく、床に布団を敷いて二人で横になっていた。

ダイ

「明日から修行して、強くなれるかな？」

リュウ

「それは君次第だ」

ダイ

「そうだよ、明日からよろしくね、リュウさん」

リュウ

「ああ、俺は寝るぞ、君も寝るんだ」

ダイ

「おやすみなさい……」

二人は眠りについた。

リュウ

「ダイ、起きるんだ、朝ご飯だ」

ダイ

「うーん、朝ご飯？」

ダイはまだ寝ぼけている。

リュウ

「そうだ、早く来ないと無くなるぞ」

リュウは意地悪そうに言った。

チュン

「全員揃ったわね、それじゃあ頂きます！」

皆

「いただきます！」

ダルシム

「ダイ君、学校は休みなんですか？」

ダイ

「うん、学校の創立記念日だから、一週間休みなんだ」

ケン

「にしては長えな」

さくら

「いつてきまーす！」

さくらは食べ終わると学校に行った。

リュウ

「ダイ、外で待っているぞ」

リュウも食べ終わり、外へとでていった。

ザンギエフ

「チュンリー、ダイに渡す物があったんじゃないのか？」

ガイル

「俺が取ってこよう」

ガイルは立ち上がり、クローゼットからリュウが来ているような柔道着を取り出した。

ガイル

「チュンリー、君が渡してくれ」

チュン

「解ったわ！ダイ君、これを着て頑張つてね！」

チュンはダイに手渡しで、小さいサイズの柔道着を渡した。

ダイ

「ありがとう！待ってて、今、着てみるから！」

別室に行き、ダイは柔道着に着替えて、リビングに戻った。

ケン

「似合ってるぜ！昔のリュウみたいだ！」

それを聞いてダイは笑顔になった。

ダイ

「じゃ、行つてきます!」

リュウを待たせまいと、急いで外に出た。

リュウ

「早かったな、ん?その姿は?」

ダイ

「チュンさん達がプレゼントしてくれたんだよ!」

ダイは微笑みながら言った。

リュウ

「似合っぞ」

そう言うとリュウは、

「ついてこい」と言い、ランニングを始めた。

公園

ダイ

「はあ、はあ、リュウさん早いよ」

リュウ

「よく走ったな、少し休もうか」

二人は1時間走った後、リュウがいつも休む公園でベンチに座りながら休んでいた。

ダイ

「ここ、水道が無いんだね…」

リュウは辺りを見渡したが、確かに水道が無かった、そこでリュウは懐から布袋を取り出しダイに手渡した。

リュウ

「これで、何か買ってけるといい」

ダイはリュウからもらった、布袋の中身を見た。

ダイ

「お金？いいの？リュウさん」

リュウ

「ああ、好きな物を買ってこい」

ダイ

「ありがとう！行ってくるよ！」

ダイは走って、近くの店に買いに行った。

ダイ

「ただいま！はい、これリュウさんの分」

リュウ

「茶か、ありがとう、飲ませて貰うよ」

二人はお茶を飲んで、喉を潤した後、再度ランニングに戻った。

ダイ

「どこまで、走るの？」

リュウ

「俺の修行場までだ、後少しだから頑張るんだ」

走ること更に1時間、寮から少し離れた、リュウの修行場についた。

ダイ

「わあー！川があるんだ！」

リュウの修行場は、周りは森で近くに川がある、静かで修行にはもってこいの場所だ。

リュウ

「準備体操だ、来るんだ」

準備体操を終えた後、ダイに川に浸かるように指示した。

ダイ

「流れがきついや、何するの？」

リュウ

「水中スクワットだ、俺もするから、真似てくれ」

リュウは水中でスクワットを始めた。

リュウ

「まずは十回だ！」

ダイ（心の中）

「十回なら出来るかも……」

そう思ったのも、つかの間、ダイの足が五回目ぐらいから悲鳴をあげていた。

ダイ

「ろおーく！ひいーち！はあーち！きゅーっ！じゅーっ！」

ダイは終わるなり、急いで川からあがった。

リュウ

「足腰にきくだろう？」

ダイ

「すごいや…、リュウさんは痛くないの？」

リュウ

「ああ、慣れてきたからな」

そついいながらも、リュウはまだスクワットをしている。

リュウ

「休んだら、再開するんだ、後、4セットだ」

ダイ

「後四十回！？頑張ってみるよ……」

ダイ

「足が上がらないや……」

リュウ

「こつちに来るんだ」

リュウは手招きをした。

ダイ

「はぁーい、何？」

リュウ

「この木を殴るんだ」

リュウは細めの木に布を巻だした。

ダイ

「この木を僕が？」

リュウ

「もちろんだ、折るまで昼飯は無しだぞ」

ダイ

「僕に出来るかな……」

リュウ

「出来るさ、殴る時はこうして…」

ダイ

「わかった、やってみるよ！」

リュウ

「さて…俺もやるか」

ダイよりも遥かに大きい木を殴り始めた。

ダイ

「やっぱり、リュウさんは凄いや、僕も頑張るぞっ！」

リュウ

「よくやったな、いい拳だったぞ」

ダイ

「手が血だらけだよ…」

リュウ

「川で洗ってくるんだ、俺は昼飯の準備をする」

ダイは川に手を洗いに、リュウは竿を二人分用意しだした。

ダイ

「ただいま、あれ？竿なんか持ってどうしたの？」

リュウ

「準備が出来た、釣りにいくぞ」

ダイ

「釣った魚がお昼ご飯なの!？」

リュウ

「ああ、金がないからな、ついてくるんだ」

リュウ達は川の近くまで行き、竿と一緒にもってきた、タツパを開けた。

ダイ

「わあ、ミミズだ!」

リュウ

「付け方を教えるぞ、餌が逃げないように……」

リュウは解りやすく説明した。

ダイ

「リュウさん!勝負だよ!」

リュウ

「望むところだ!」

二人は釣りを始めた。

リュウと少年〜二部〜（後書き）

短編を書くにあたって、話はある程度ストックしてるのですが切れたらパニックになるので、何かアイデアがあったら教えてくれると嬉しいです！

感想の催促をしてる訳ではないんですよ！

リュウと少年〜最終部〜（前書き）

作者「忙しいな…ってうわあ!？」

ダルシム「作者さん」

作者「人の部屋にレポートしてこないでよ！」

ダルシム「最近、私の出番が少ないんですが…」

作者「安心したまえ、ちゃんと考えているから！」

ダルシム「本当ですか？」

作者「たぶん…」

リュウと少年〜最終部〜

ダイ

「僕の勝ちだよっ！」

リュウ

「やるじゃないか、ダイ」

ダイのバケツには大量の魚が入っていた、リュウも魚を釣っていたが、ダイ程ではなかった。

リュウ

「昼飯にするか」

ダイ

「うん！」

二人はせっせと、食事の用意をした。

ダイ

「木はこれぐらいでいいかな？」

リュウ

「十分だ！それを重ねて置いてくれ」

リュウの指示どおり、ダイは木を重ねていった。

ダイ

「やったよ」

リュウ

「ありがとう、火をつけるぞ」

ポケットに入れていた、マッチで木に火をつけた、数分経つと、パチパチと音をたて火が強くなってきた。

ダイ

「魚焼こうよ！」

リュウ

「そうだな」

木の枝に刺した魚を火であぶって、食べた。

ダイ

「おいしいねー」

リュウ

「ああ、塩があるから使ってくれ、もっと旨くなるぞ」

二人は楽しい、食事の時間を過ごした。

リュウ

「次は、実戦練習だ」

ダイ

「実戦!？」

リュウ

「たまにケンが相手してくれるんだが、今日はダイ、君とやりたい」

ダイ

「勝てないよ！リュウさんに！」

リュウ

「心配するな、俺は攻撃をしない、君が攻めるだけだ」

ダイ

「いいの？」

リュウ

「防御も修行のうちだからな」

ダイ

「わかった！やってみるよ！」

リュウ

「よしっ！かかってくるんだっ！」

ダイ

「いくよ！リュウさん！」

ダイはリュウに攻撃を繰り返した…

ダイ

「全然当たらないや…」

リュウ

「いい拳だった、今日は終わりにしよう」

辺りはもう薄暗くなっていて、夕方になっていた。

ダイ

「うん！」

二人は寮に帰った。

それから一週間後…

ここはよくリュウが立ち寄る公園、周りには誰もおらず、三人の子供だけがサッカーで遊んでいた。

少年A

「最近あいつ、見ねーな」

少年B

「俺らにビビって逃げたんだぜ」

少年C

「ダイは腰抜けなんだよ」

三人がそう話していると…

ダイ

「サッカーボールを返して貰いに来たよ！」

少年 B

「取り返しにきたのかよ！」

ダイ

「もう一回 言つよ、返して！」

少年 C

「嫌って言ったら？」

ダイ

「力ずくでも取り返すよ！」

少年 A

「ふざけんな！弱虫のくせにやってみろよ！」

ダイ（心の中）

「リュウさん…見ててよ！必ず取り返してみせるから！」

少年 A

「あんな弱虫、ボコボコにしちまえ！」

三人はダイの方へと走って来た。

ダイ

「いくぞ！」

ダイも三人の方へと走り出した。

少年 B

「つりゃ!」

Bはダイの顔を殴ろうとするが、ダイは避けてBの腹を殴った。

B

「うお!?!」

ダイのパンチは腹に練り込み、Bは倒れた!

ダイ

「一人目だ!」

リュウ

「いいぞ!」

リュウは木の後ろに隠れて、ダイの戦いを見ていた。

少年A

「調子にのんなよ!C、やれ!」

Cはいつの間にか、ダイの後ろに居てダイをpushし付けた!

少年A

「pushし付けたよ!おらっ!」

ダイ

「それなら!」

Aはダイを殴ろうとしたが、ダイはCを背負い投げして、Aにぶつ

けた。

少年C

「いつてえ〜」

少年A

「こいつ、ダイか？」

ダイ

「僕はもう弱虫じゃないんだ！」

少年A

「うるせえんだよ！」

AとCはその場にあつた、石を投げた。

「パシィ！パシィ！」

ダイの顔に石が当たって、血がでてているが、怯む事なく二人の方へと歩いていく。

ダイ（心の中）

「逃げちゃだめだ！サッカーボールを取り返すんだ！」

少年A

「これなら、どうだ！」

Aはサッカーボールをダイの方へと蹴った。

「バコッ！」

サッカーボールはダイの顔に当たった。

少年C

「今だやるぞ！」

AとCはうずくまっっているダイを何度も蹴っている。

ダイ

「痛い…けど、僕は諦めない！」

ダイは立ち上がった。

少年A

「まだ動くのかよ！」

ダイ

「いくぞ！」

ダイは物凄い速さで、Cの腹を殴り気絶させた。

少年A

「くそっ！」

Aはそう吐き捨てると今度は落ちていた、太い木の棒を手にとり殴りかかった。

ダイ（心の中）

「逃げるな！戦うんだ！」

少年A

「うらあ！」

ダイは横に振ってきた木の棒をしゃがんで避け、Aは無防備になった。

リュウ（心の中）

「今だ！」

ダイ

「昇龍拳！！！」

避けた瞬間に拳を突き上げて、Aの顎をとらえた。

少年A

「ぐあっ……」

Aはダイの昇龍拳によって倒れた。

ダイ

「やった…やったよ！」

ダイはリュウの方へと走り出した。

リュウ

「よくやったな！見事な昇龍拳だった」

ダイ

「ありがとう！リュウさん！そうだった！」

ダイは使われていたサッカーボールを拾った。

リュウ

「よかったな」

ダイ

「うん！最後のお願いがあるんだけど…」

リュウ

「何だ？」

ダイはサッカーボールをリュウに差し出した。

ダイ

「僕、もう引越すするでしょ？だから、受け取って欲しいんだよ」

リュウ

「だが、死んだ兄のじゃないのか？」

ダイ

「お兄ちゃんもリュウさんだったら喜ぶよ！」

リュウ

「わかった、大切にするよ」

そう言うと、リュウは手をダイの方へとだして、握手を求めた。

「ガシッ！」

二人は握手を交わした。

リュウ

「いつ頃だ引っ越しは？」

ダイ

「もうすぐだよ…」

リュウ

「そうか、元気でな！」

ダイ

「うん！頑張る！」

そのあと、リュウ達に見送られダイはこの町を後にした。

一週間後

チユン

「ダイ君から手紙よ！」

ケン

「ほんとか！？見してくれよ！」

「みなさんお元気ですか？僕は引っ越し先の町で友達も出来て楽しく過ごしています。」

僕は柔道を習いました、いつかリュウさんやケンさん見たいな強い人になりたいです。」

今度遊びに行くので、その時は宜しくお願いします。

それでは、また会える日を楽しみにしています。」

リュウ（心の中）

「ああ、俺もだ！ダイ！」

完

リュウと少年〜最終部〜（後書き）

ダイという名前は、ダイの大冒険っていう漫画の主人公から引用しました！

いや、それだけでした。。。；；；

戦士達の合コン ～一部～（前書き）

作者「暑い」

リュウ「耐えるのも修行の一つだ」

作者「たまに君が、重度のマゾヒストに見えて仕方ないよ…」

戦士達の合コン ～一部～

ケン

「でさー、リュウが…」

A子

「きゃはは！リュウって人面白いねー」

ケンは毎日の日課であるナンパに成功し、三人の女性とお茶をしていた。

B子

「リュウってどんな人なの？」

ケン

「格闘バカって奴だな、あいつは」

C子

「今度、会わせてよ！」

ケン

「別にいいぜ！」

ケンは即答した。

A子

「じゃあ明日、合コンしましょー」

ケン

「合コン!？」

A子の唐突な提案に驚いた。

A子

「だめなの？」

ケン

「駄目って訳じゃあねえけどよ……」

B子

「じゃあいいじゃない!」

C子

「ケンの知り合いも見てみたいしね!」

ケン

「人数はどうする？」

A子

「うーん、ケンは後、五人呼んで来て! 私たちも頭数揃えるから!」

ケン

「俺を入れて六人か…わかった!」

ケンはA子達の気分を悪くしないように、しぶしぶ承諾した。

B子

「じゃあ! また明日ね」

ケン

「ただいまー」

チユン

「あら、お帰り！」

チユンは夕ご飯の用意をしながら言った。

ケン

「リュウ達は？」

さくら

「今日は、一緒に修行しに行ったよ」

テレビを見ていたさくらが、答えた。

ケン

「そうか、飯食った後にも、誘うか…」

さくら

「何か言った？」

ケン

「なんでもねえよ！」

さくら

「変なケンさん…」

しばし待つこと10分後、リュウ達が帰って来た。

本田

「良い汗かいたでござす！」

リュウ

「ああ！」

ガイル

「腹が減ったな…」

チュン

「ご飯なら、出来てるわよ！」

リュウ

「そいつは重畳」

ダルシム

「いただきますしょうか！」

ザンギエフ

「おう！」

一同は食事を済ました後、各自、自由に過ごしていた。

ケン

「さてと…」

ケンはガイルの部屋に向かった。

本田

「そこでごわす！」

ダルシム

「まだですよ！」

ケン

「ん？騒がしいな……」

ガイルの部屋から、賑わった声がしていた。

ケン

「ノックするか……」

「コンコン！」

「ガチャ」

ガイル

「ケンか、お前もやりにきたのか？」

ケン

「え？」

ケンにはさっぱり解らなかった。

ガイル

「入ったらわかるさ」

ガイルはケンを部屋に入れた。

「バキッ！ドォーン！ KO！」

本田

「ダルシム殿は強いでごわすなー」

ダルシム

「それ程でもないですよ」

ダルシム達はゲームをしていた。

ケン

「ゲーム？買ったのか？」

ガイル

「いや、さくらにすすめられてな、買ったら意外と面白いから毎晩こうしてやってるんだ」

ケン（心の中）

「こいつら、毎晩ゲームしてたのかよ……」

ザンギエフ

「お、ケンじゃねえか！」

ザンギエフが気付くと、ダルシムと本田もゲームを止めて、ケンの方に振り向いた。

ダルシム

「ケンさんも、よかつたらやります？」

ケン

「いいよ、それよりガイル達に頼みがあるんだ！」

ガイル

「何だ？」

ケン

「お前達に合コンにきてほしい！」

手を合わせて頼んだ。

ザンギエフ

「皆と相談するからよ、待っていてくれ」

そういうと、ガイル達は相談をし始めた。

5分後

本田

「いいでござすが、条件付きでござす！」

ケン

「条件付き!？」

ガイル

「ダルシムとゲームで勝ったら、合コンに参加しよう」

ダルシム

「不本意ですが、やるからには全力でいきますよ!」

ケン

「なんでこうなるんだよー！」

ザンギエフ

「普通にOKしたら、つまらんからな！ガハハハッ！」

ザンギエフはケンの気持ちなど知らず、豪快に笑う。

ケン（心の中）

「覚えとけよ」

ダルシム

「やり方を教えますよ、ここがパンチで……………」

数分の間、ダルシムがケンにゲームの仕方を教えた。

ケン

「…よし！一通り覚えたぜ！」

ダルシムに挑むゲームは

「格闘ゲーム」で三回勝負で、二回先に勝利したほうが勝ちというルールだ。

ガイル

「では、始めてもらおうか」

ケン

「わかったぜ！」

ダルシム

「私は、ポリマーとキャシャーンでいきますー！」

ケン

「俺は、バツとモリガンだ！」

それぞれキャラクターを選んで、ゲームを始めた。

「バキツ！ドォーン！KO！」

ケン

「強えな…」

ダルシム

「あなたもですよ」

一回戦はダルシムの勝利だ。

ケン（心の中）

「こりゃ、やべえぞ…なんでこんなに上手いんだよ、ゲームが上手い僧侶なんて聞いたことねえよ」

ダルシム

「続けますか？」

ケン

「当たり前だ！」

ダルシム

「それじゃ続けましょう！」

二回戦が始まった。

ケン

「くっ…互角か」

ケンとダルシムのキャラクターのバツとキャシャーンの体力ゲージは半分くらいで、パートナーは両方既に倒されていた。

ダルシム

「今です！ブルータルアスク！」

キャシャーンはダルシムのコマンド入力により、大きな衝撃波の柱を放った。

ケン

「待ってたぜ！」

バツはキャシャーンの必殺技をバツクしてかわした。

ダルシム

「しまった！」

ケン

「隙だらけだせ！全開気合弾！」

必殺技をかわされて隙だらけのキャシャーンにバツも必殺技を放った。

「K.O.！」

ケン

「よっしゃっ！」

ケンは勢いよく、ガッツポーズをした。

本田

「凄いでごわすな！」

ガイル

「ほう、やるな」

ダルシム

「さすがケンさんですね！」

ケン（心の中）

「なかなか、おもしれえな……」

次もコツを掴んだケンが勝利した。

ダルシム

「約束どおり明日、私たちは出席しましょう」

ケン

「ああ！ありがとな！」

ダルシム

「いえいえ、こちらこそ、楽しかったですよ」

約束どおり、ダルシム達は合コンに出席することになった。

ガイル

「俺と勝負してくれないか？」

ガイルはケンにゲームの対戦を申し込んだ。

ケン

「上等だぜっ！」

ザンギエフ

「俺も！」

本田

「わしも！」

ガイルに続き、ザンギエフ達も申し込んだ。

ケン

「全員あいてしてやるぜ！」

ケンはガイル達とゲームを楽しんだ。

3時間後

ケン

「今、何時だ？」

ザンギエフ

「12時だが」

ケン

「やべえ！じゃあな！また来るからよ！」

持っていたコントローラを放り出して、ガイルの部屋を出た。

ガイル

「騒々しい奴だな」

ケン

「リュウ寝てるだろうな…」

ケンはリュウの部屋の前に立っていた。

ケン

「関係えねえか、たたき起こしてでも合コンに出席させねえと…」

「ガチャ」

ケン

「リュウくん、起きてつか？」

ケンは部屋の電気をつけた。

ケン

「あれ？居ねえぞ」

リュウが居ないと解って、外に出ようとした刹那…

リュウ

「何か用か？ケン」

ケンの後ろからリュウの声がした。

ケン

「うわぁ！？ビックリさせんなよ！」

リュウ

「済まなかった、俺に何か用があるんだろう？」

ケン

「そつだよ！リュウくんに頼み事が…」

リュウに合コンの事をはなした。

リュウ

「合コン？」

ケン（心の中）

「あちゃ〜、知ってる訳ないか〜」

ケンはそう悟ると解りやすく説明した。

ケン

「女の子と楽しくお茶するんだよ」

リュウ

「なるほど、それに出席してほしいんだな？」

ケン

「ああ！来てくれるか！？」

リュウ

「いや、御免こつむる」

「ガクッ！」

ケン

「思わせぶりな事言っというて、それかよ！」

リュウ

「そんな事は言っていないが」

ケン

「とりあえず、頼むよ！」

ケンは頼み倒した。

リュウ

「俺は女が苦手だ」

ケン

「良い機会だから、女嫌いを克服…ってなんだそれ？」

ケンはリュウの右手に持っている袋が気になった。

リュウ

「これか？水ようかんだ」

リュウは袋から出して、ケンに見せた。

ケン

「水ようかん…、待てよ！？リュウはこれが好物だったな…」

リュウ

「どうした？食べたいのか？済まないがこれはやれんぞ」

ケン

「ちげえよ！水ようかんをもっと食いたくないか？」

リュウ

「何だと？」

ケン（心の中）

「よし！ヒットしたぜ！」

ケンは心の中で、ガッツポーズをした。

ケン

「俺が今度、お前に水ようかんを好きにだけ食わせてやるから、明日、来てくれねえか？」

リュウ

「す、済まない、少し考えさせてくれ……」

リュウは考えこんだ。

ケン（心の中）

「コイツ、本当に好きなんだな、水ようかん……」

5分後

リュウ

「しかたない……出席しよう」

ケン

「ありがとよ！」

リュウは水ようかんの誘惑に負けた。

リュウ

「明日の何時だ？」

ケン

「午後の五時だぜ」

リュウ

「わかった」

こうしてリュウ達を合コンに呼ぶことに成功したケンは、疲れきった体で自分の部屋に戻った。

ケン

「何で、頭数揃えるだけで、こんなにも疲れなきゃなんねーだよ……」

そうぼやくと、すぐに爆睡した。

戦士達の合コン ～一部～(後書き)

今回は長めに書きました！

戦士達の合コン ～二部～（前書き）

ガイル「投稿が遅すぎないか？」

作者「テストがあつたもんだから……」

ガイル「言い訳無用！ ソニックブーム！！」

作者「え？嘘！？ぐわあ！！」

戦士達の合コン ～二部～

ケン

「ふん、ふん、ふん」

現在は土曜の午後2時、ケンは夕方の合コンに備えて、髪の毛をセツトしたりしていた。

ケン

「こんなもんか…」

髪の毛のセットを終えると、リュウ達の様子を見に行った。

ザンギエフ

「これでいいか？」

ガイル

「うむ、似合っぞ」

ザンギエフ達は、リビングで、自分達の服装チェックをしていた。

ダルシム

「私はどうです？」

ザンギエフ

「よく似合っぞ！」

本田

「わしは？」

ダルシム

「とても似合いますよ!」

「ガチャ」

ガイル

「ケンか、どうだ似合ってるだろう?」

ガイルはリビングに入って来たケンに、自分の服装を見せた。

ケン

「似合ってるも何も、いつものタンクトップを赤にただけじゃねえか!」

ガイル

「何を言っている、髪型が変わっているだろう」

ケン

「あ、オールバックだ」

ガイルはいつも、立ち上げていた髪型を、今日はオールバックにしていた。

ケン

「ガイルはともかく、何でお前ら全員、赤いタンクトップなんだよっ!」

本田

「このなかで、一番おしゃれなガイル殿を真似れば良いと思ったで

「ごわすが…」

ダルシム

「私も」

ザンギエフ

「俺もだ」

ケン

「まあ、全員赤いタンクトップだけは止めてくれよな」

ダルシム

「わかりました」

ケン

「あれ？リュウの奴は？」

ザンギエフ

「修行に行ったぜ、これ、置き手紙だ」

ザンギエフはケンにリュウが書いた、置き手紙を渡した。

「修行にいつてくる。」

ケン

「これだけか？」

リュウのあまりにも、簡潔な置き手紙に啞然とした。

ザンギエフ

「ああ！」

ケン

「幼稚園生でも、これよりマシな置き手紙書くだろ！？普通！」

本田

「後で、気を追いかけるって行ってたでござす！」

ケン

「ならいいんだけどよ〜」

ケンは胸を撫で下ろした。

ケン

「じゃ、また後で様子見に来るからよ」

そう言うとケンはリビングを後にした。

一方リュウは…

リュウ

「まだ、2時か…」

リュウはケンにもらった、時計を見て呟いた。

リュウ

「ケン達の気はまだ、寮から動いてないな、もう少しやるか…」

リュウはのそりと起き上がり、修行を再開した。

ケン

「夕方の6時から、12時まで貸し切りOKなんだな!? 助かったぜ!」

「ガチャ!」

ケンは電話を置いた。

ケン

「ふう〜、場所も確保出来たし、安心だな!」

ケンは友達に無理を言って、店を貸し切りにもらったのだ。

4時間後…

ケン

「みんな、行くぞっ!」

ガイル

「もう、そんな時間か」

ダルシム

「なんだか緊張しますね〜」

ザンギエフ

「そうか? 早く、ウオツカが飲みたいわっ!」

ケン一行は合コン会場へと向かった。

一方リュウは…

リュウ

「むっ？ケン達の気が動いた…そろそろ行くか…」

リュウもケン達の気を追い掛けて、合コン会場に向かった。

ケン

「ここだ！」

本田

「ハイカラな店でこわすな！」

ガイル

「入るか」

ケン一行は店に入った。

女A

「遅いじゃない！」

女B

「あれ？一人足りないわよ？」

ケン

「後から、来るって！」

女C

「とりあえず、座りましょうよ！」

男と女で向かい合うように座った。

ケン

「司会は俺がするぜっ！」

女E

「いいわよ！」

ケン

「まずは男性陣から、自己紹介だぜ！」

ケンはガイル達の方を向いて言った。

ガイル

「俺から言おう、名前はガイル、アメリカ出身で元軍人だ」

簡潔に自己紹介を済ませた。

ケン

「はいっ！ガイルさんの自己紹介でした！次はダルシムさん！」

ダルシムはいきなり名前を呼ばれ、ドキッとした。

ダルシム

「私ですか！？名前はダルシム、出身はインドでカレーが大好きです」

ケン（心の中）

「コイツら…小学生の自己紹介かよ」

といった具合に、次々に自己紹介を済ませていった。

ケン

「お互いのことを知った所で、女性陣、お好みの男性を選んで下さい！」

ザンギエフ（小声）

「ケン、どういう事だ？」

ケン（小声）

「好きな奴と隣だったら、会話がはずむだろ？」

ザンギエフ（小声）

「それはわかったが、好みが重なったらどうするんだ？」

ケン（小声）

「それはねえって」

ケンは断言した。

女A

「私はケンっ！」

女B

「軍人って男らしいわ、私はガイルさん！」

女C

「ヨガって神秘的じゃない？私はダルシムさん！」

女D

「お相撲さんってカツコイイ！私は本田さん！」

女E

「一緒にウオツカ飲みましょう！私はザンギエフさん！」

女F

「私は…って、居ないわよ!？」

リュウはまだ来ていなかった。

ケン（心の中）

「まだ来ねえのかよ!？」

そう思った刹那…

「バアン!!!」

勢いよく扉が開いた。

リュウ

「遅れて申し訳ない」

ケン（心の中）

「全然申し訳なさそうな顔してねえよ、コイツ」

ケン

「遅せえじゃねえか!」

リュウ

「居場所は解ったんだが、道が複雑だった」

ケン

「まったく、取りあえず、そこに座ってくれ！」

ケンは女Fの隣をリュウに座らせた。

女F

「あなたがリュウさんね？」

リュウ

「ああ…そうだが」

女F

「今日は楽しませようね」

リュウ

「ああ…」

こうして、戦士達の合コンが始まった。

戦士達の合コン ～二部～ (後書き)

夏休みが始まりました!!今年こそは、焼けてやる!

戦士達の合コン ～最終部～ (前書き)

作者「夏休みが始まって、宿題に気を取られていて遅くなっています  
ません！」

チユン「これからも見てね！」

戦士達の合コン ～最終部～

先ほど組んだペアでみんな楽しそうに会話をしていた。

ケン

「いやー、俺が全米チャンプになった時は……」

女A

「前も聞いたわよ、その話！」

ガイル

「奴に親友を殺されてな……」

女B

「ソレは気の毒ねえ……でも元気だして！」

ダルシム

「ヨガフレイム！」

女C

「すっごーい！」

本田

「わしは怪力無双とうたわれた男でござすよ！」

女D

「たくましいわ！」

ザンギエフ

「なかなかやるじゃねえか」

女E

「私お酒に強いんだからっ！」

…と具合に合コンらしくなってきたのだが、リュウのペアだけ異質な空気が漂っていた。

リュウ

「……………」

女F

「……………」

リュウ

「俺と居ても退屈だろう、ケン達の所に行かないのか？」

リュウは酒をちびりと飲みながら言った。

女F

「私、静かな人がいいの」

リュウ

「そうか、そいつは重畳」

リュウのペアはケン達とは違う楽しみ方をしていた。

しかし、その静寂をケンが見事に破った。

ケン

「みなさん、交友を深めた所で、カラオケタイムといきましょう！」

順番を決めた結果、ケンペア、本田ペア、ザンギエフペア、ダルシムペア、ガイルペア、リュウペアの結果になった。

二人で歌っても、一人でも歌っていいそうだ。

ケン

「一番ケン&女A！二人で歌うぜ！曲名は夏の音色！」

そういうと、ケンペアはマイクを握りしめ、歌いだした。

ケン

「耳をすませば聞こえる〜真夏の音色お〜」

女A

「気持ち互いに解りあう〜」

ケンペアは見事に熱唱し、91点という高得点をたたき出した。

そして各ペア達も熱唱し、合コンも盛り上がっていたのだが、問題のリュウの番が来たのだ。

ケン

「がんばれよー！」

リュウ

「一人で歌う、曲名は戦士達よ」

ケン（心の中）

「一人で歌うのかよ、なかなか面白そうじゃねえか！」

女A

「彼、何で一人なの？」

女F

「私歌うのが苦手って言ったら、一人で歌ってやるって…優しいわ」

リュウは前奏が流れて来るとマイクに力を入れ、歌いだした。

リュウ

「やまとだまし〜、本当の強さを探して〜、道から道拳を突き上げる〜！」

みんな

「うまい…！」

リュウの低く渋い声はこの歌に合っている。

リュウ

「戦え〜、戦士達よ〜！」

歌い終わると静かにマイクを置いた。

本田

「感動したでござす！」

ダルシム

「得点がでますよ！」

モニター画面に点数が映し出された…

ケン

「なにい！？98点！？マジかよっ！？」

ケンペアの点数がぬかれたのだ。

女F

「上手いわね、歌得意なの？」

リュウ

「そんな事はないさ、久々に歌うと気持ちいいものだな」

リュウの意外な一面を垣間見た瞬間だった。

カラオケが終わった後はゲームをしたり食べ物をつまんだり酒を飲んだりして楽しんだ。

ケン

「ぶはあゝ、うめえゝ」

女A

「ちょっとケン？飲み過ぎじゃない？」

ケン

「らあ〜いじょうぶだぜ〜」

女A（心の中）

「やっぱり飲み過ぎよ…」

一方リュウは…

ザンギエフ

「ガハハッ！良い飲みっぷりだ！」

ガイル

「リュウ、飲み過ぎではないのか？」

リュウ

「そうかもしれないかもしれん、所で俺は何故ここにいるんだ？」

ガイル

「ザンギエフ…飲ませすぎだ」

ザンギエフ

「そうみたいだな…」

ケン

「リュウ〜！、こないだ貸した金返しやがれ！」

リュウ達に大声を張り上げながら近づいてきた。

ガイル

「酔っているのか？」

女A

「そうなのよ…」

リュウ

「俺は盗んだ覚えはないぞ！」

ザンギエフ

「話が噛み合っていないぞ…」

ケン

「御託はいらねえんだよ！男ならこっちで来いよ！」

酔っているケンは拳をリュウに突き出して挑発をした。

ガイル

「悪酔いが過ぎるぞ…」

リュウ

「腐った根性を叩き直してやるっ！」

ケン

「へっ！冗談にしては笑えねえ…おええええ！！」

ケンは不意に嘔吐した。

ダルシム

「私が処理します！」

ガイル

「すまないな……」

リュウ

「日頃の鍛練を怠っているからだ……うつ！？」

リュウも嘔吐した。

女F

「今度は私がするわ」

ガイル

「本当にすまない……」

ケン

「はあ、はあ……来るなら来いよ！」

リュウ

「はあ、はあ……そのつもりだっ！」

バキッ！ドカッ！ガッシャーン！！

二人は酔った勢いで喧嘩を شدしたのだ。

本田

「やめるでござすよ！」

本田は二人を止めるべく、割って入った。

ケン・リュウ

「うるさいっ！」

本田は二人に突き飛ばされ、派手に壁にぶつかり、気絶した。

本田

「無念でござす… がくっ」

ダルシム

「本田さん！」

ザンギエフ

「ガイルどうする!?!」

ガイル

「ここは危険過ぎる、避難するぞ」

ガイル達は被害を受けなかったために店の外に避難した。(本田はザンギエフが担いで運んだ)

あらあ！波動拳！ 甘いつ！昇龍拳！

店からはまだ、二人が喧嘩している声が響いていた。

ガイル

「気が済むまでやらせるか…」

女A

「そうね…」

それから数時間が経った…

ケン

「うう〜ん…朝か？それにしても頭が痛てえ…」

リュウ

「ケン、俺達は一体…」

ケン

「まったく思い出せねえよ…それよりも頭が…」

リュウ

「ガイル達もいない…、店も半壊状態だ…」

リュウの言う通り、店は半壊状態でリュウ達以外だれもいないのだ。

ケン

「なんだこの紙？」

ケンはリュウの柔道着から、見える紙を見つけた。

リュウ

「ん？なんだこの紙は？誰が…」

ケン

「俺が読んでやるよ」

請求書

リュウ様 ケン様

750000円

リュウ

「ケン？顔色が悪いぞ」

ケン

「とほほ…、明日からドイツと働くか…」

オマケ

チュン

「ケンとリュウはどこに行ったの？」

ガイル

「長い旅に出たとでも言っておけ…」

チュン

「どづいつ事かしら？」

完

戦士達の合コン ～最終部～ (後書き)

感想待ってます！

さくらの追跡劇！〜一部〜（前書き）

作者「暑いね〜」

本田「暑い時は食って体力をつけるでござす！」

作者「食べるだけで体力がついたらねえ〜」

リュウ「横着せずに修行をするんだ！」

作者「……………だよね」

さくらの追跡劇！〜一部〜

今日は日曜日。休日は朝ご飯を皆揃って食べる事もなく早起きをしなくてもいいのだ、リュウも日曜日だけは修行を休み、昼まで寝ているのだ。(リュウいわく、休む事も修行の内とか)

リュウ

「昼か…」

リュウはむくりと起きると下のリビングに向かった。

さくら

「リュウさん、おはよー！」

チュン

「おはよう、リュウ」

二人はテレビを見ていた。

リュウ

「ああ、ケン達は？」

さくら

「ゲームセンターに行ったよ、新しいゲームが入ったんだって！」

リュウ

「そうか…(よく解らんが…)(」

チュン

「お昼ご飯食べる？」

リュウ

「いや、今から散歩に行く、有り難いが遠慮しておく」

さくら(心の中)

「散歩!？」

さくらは散歩という言葉に反応した。

リュウ

「行ってくる」

チュン

「門限までに帰ってくるのよ!」

チュンはリュウにそう伝えて送り出した。

さくら

「ねえ、リーさん」

チュン

「何？」

さくら

「リュウさんって日曜日は絶対に散歩にいくよね」

チュン

「言われてみればそうよね」

さくら

「気になるなあ……」

チユン

「確かに…散歩には毎回、夕方の七時ぐらいに帰ってくるし…」

さくら

「私も散歩にいつてくる！」

散歩に行こうとしたさくらをチユンリーは止めた。

さくら

「リ、リーさん？」

チユン

「さくらちゃん、あなた、リュウの後をつけるつもりでしょ？」

怒られる！さくらはそう思った。

チユン

「捜査の基本は足と気合いよ！」

さくら

「捜査じゃなくて追跡じゃ……」

チユン

「そうだったかしら？とにかく、やるなら完璧にきなさい！」

さくら

「そつだね！行ってきまゝす！」

チユン

「頑張るのよ！！」

こうして、さくらの追跡劇が始まった…

さくら

「リュウさんって街歩くんだった…」

さくらはリュウに気付かれない様に気配を消して追跡している。

リュウ

「今日は良い天気だ…」

リュウは街をぐるりと回ると、古びた店の前で止まった。

さくら

「ここは…和菓子屋さん…？」

リュウ

「入るか…」

古びた店の中に入っていった。

さくら

「よし！ケンさんに貸してもらった（とっさに持ってきた）サン  
グラスと帽子で…」

変装したが、しばらく様子見を外からすることにした。

ガチャ

「あら？リュウさん、よく来たねえ」

リュウ

「蓮さん、調子はどうだ？」

リュウは店長らしきお婆さんに声をかけた。

蓮さん

「売り上げ以外なら調子は良いよ」

リュウ

「そうか、体が元気ならばそれで良い」

蓮さん

「違いないねえ」

そんなリュウの様子を見ていたさくらは…

さくら

「何話しているか解らないけど、あんな楽しそうなりゆうさん闘い以外で初めて見た…」

リュウ

「蓮さん、いつもの頼む」

蓮さん

「はいよ、水羊羹だね？」

リュウ

「ああ」

蓮は注文を受けると厨房に向かった。

さくら

「そろそろ、行こうかな…！」

さくらは意を決して、和菓子屋さんに入った。

ガチャ

蓮さん

「いらっしやい、ちょっと座って待っててねえ」

さくらはリュウに近いテーブルを選んで座った。

リュウ

「……………」

リュウはさくらの方をチラリと見た。

さくら(心の中)

「バレてないよね〜!?!」

さくらはリュウと目を合わせまいと視線をそらした。

さくら（心の中）

「ふう〜、疲れるなあ〜」

蓮さん

「リュウさん出来たよ」

蓮さんが運んで来たのは、普通の水羊羹とは比にならないくらい大きなものだ。

さくら

「デカすぎじゃない…?」

リュウ

「相変わらず上手そうだ」

そういうと巨大水羊羹をむさぼり始めた。

さくら

「水羊羹もすごいけど、リュウさんも凄い…」

蓮さん

「待たせたねえ、注文は決まったかい？」

さくらは一瞬だけ考えると…

さくら

「リュウさ…じゃなくて！あそこの人と同じものくださいな！」

蓮さん

「こりゃ驚いたねえ、ホントに食べれるのかい？」

さくら

「うん！」

蓮さん

「そうかい、それじゃ楽しみに待っててねえ」

さくら（心の中）

「アレくらいなら食べれるかな？」

待つこと5分…

蓮さん

「お待たせ、残さず食べておくれよ」

さくら

「はい！」

10分後…

さくら

「おいしいけど…お腹がふくれる…」

予想以上にお腹がふくれる水羊羹に苦戦していた。

さくら

「あ、そつだリュウさんは…」

リュウは食べ終えて蓮と喋っていた。

さくら

「早く食べなきゃ!」

さくら(心の中)

「アレくらいなら食べれるかな?」

待つこと5分…

蓮さん

「お待たせ、残さず食べておくれよ」

さくら

「はい!」

10分後…

さくら

「おいしいけど…お腹がふくれる…」

予想以上にお腹がふくれる水羊羹に苦戦していた。

さくら

「あ、そうだリュウさんは…」

リュウは食べ終えて蓮と喋っていた。

さくら

「早く食べなきゃ!」

さらに10分後…

リュウ

「馳走になった、また来るよ」

蓮さん

「また来ておくれよ」

リュウはカウンターにお金を置いて店を出た。

さくら

「あ！リュウさん行っちゃった！」

さくらは残った水羊羹を急いで平らげた。

さくら

「ご馳走さまでした！」

さくらはリュウを追うため店をでた。

蓮さん

「ちよいとお待ち〜！」

さくら

「はい！？」

蓮さん

「料金払い忘れてるだけどねえ」

さくら

「あ……………」

さくら

「見失っちゃった…、でも、リュウさんの気を感じれば…」

さくらは目を閉じて集中した。

さくら

「力強い気を感じる…これがリュウさんだね…」

リュウの力強い気を感じ、さくらはその方向に走って向かった。

さくらの追跡劇はまだまだ続く…

さくらの追跡劇―一部―(後書き)

アイディアなどがありましたら、報告お願いします！

さくらの追跡劇！〜二部〜（前書き）

作者「数学の宿題が終わらないよぉ〜！」

ケン「どうしたんだ？作者？」

作者「この問題が解けないんだよ〜」

ケン「どれどれ…俺には簡単過ぎて、解らねえな」

作者「単に解けないんでしょ」

ケン「うるせーよ！リュウ解けるか？」

リュウ「……… $y = 5x + 9$ だな」

作者「合ってるか答えをしてみるよ…」

ケン「あるなら最初から見ろおおおお！…！」

さくらの追跡劇！〜二部〜

さくら

「あ！居た！」

リュウは街の中の人込みをすりぬけて歩いていった。

さくら

「今度はどこに行くんだろ…あつ！」

いきなり人込みの中から出て人気のなさそうな裏道を通っていった。

さくら

「追わなきゃ！」

さくらは人込みを掻き分けてリュウが入った裏道に向かった。

さくら

「ん？また何かの店の前に立ってる…」

リュウは人気の無い裏道にある一つの店を、のれんをくぐって入っていった。

さくら

「また、様子見だね…」

店の前でリュウの様子をうかがう事にした。

「いらっしゃーい！って、リュウさん！」

中学生くらいの少年がリュウにあいさつをした。

リュウ

「タケトか！元気にしてたか？」

タケト

「うん！」

リュウ

「何故、番台をしているんだ？」

リュウはタケトに聞いた、そう、ここは温泉の店だったのだ。

タケト

「父さんがお風呂掃除してるからだよ、呼んでくるよ！」

リュウ

「忙しいのなら別にいい…行ってしまった…」

そう言い残すとタケトは風呂場に走っていった。

そのころさくらは…

さくら

「よくみたらこのお店、温泉……さすがにこれは無理だね……」

さくらは悟ったか、リュウが店から出るまで待機することにした。

「リュウさん！来てくれたのかい」

リュウ

「ああ、零さん、あれからは大丈夫なのか？」

あれからとは、この前この温泉を訪れた時、ルールを守らない客を注意した（喧嘩を挑まれて殴り倒した）事だ。

零さん

「おかげさまで大丈夫だよ」

リュウ

「そいつは重畳、よかった」

タケト

「父さん、お風呂掃除、手伝うよ！昼はお客さんは来ないからね！」

ここの温泉は昼は客が少なく、夕方には客が多くなる、そのためリュウは客の少ない昼に訪れているのだ。

零さん

「助かるよタケト、リュウさん、終わるまで待っていておくれ」

リュウ

「待ってるのも暇だ、俺も手伝わしてくれないか？」

タケト

「やったあ！リュウさんも一緒だ！」

零さん

「いいのかい？リュウさん？」

リュウ

「二人より三人の方がいいだろ？」

零さん

「済まないねえ、じゃあ、頼むよ」

タケト

「よし！やろう！」

このあと三人で温泉の掃除を終え、リュウは掃除したばかりの温泉にタケトと入っていた。（零は番台をしにいった）

タケト

「気持ちいいね〜」

リュウ

「ああ、自分達できれいにした風呂だから尚更だな」

タケト

「ねえ、リュウさん」

リュウ

「ん？どうした？」

タケト

「ハチマキ何でつけてるの？」

リュウは愚問と言わんばかりに少し微笑み説明した。

リュウ

「体の一部みたいな物だ、つけてないと落ち着かん」

そう、リュウは頭を洗う時以外は必ず頭にハチマキを巻いているのだ。

タケト

「大切ななの？」

また少し微笑んで答えた。

リュウ

「……そうだ、大切な物だ」

タケト

「そっか、だからいつも付けてるんだよね！」

リュウは頷くと湯舟からあがった。

リュウ

「タケト、体を洗うぞ」

タケト

「うん！」

頭に乗せていたタオルで体を洗い始めた。

タオル

「リュウさん、背中流すよ」

リュウ

「済まないな、頼む」

くるっとタケトの方に背中を向けた。

タケト（心の中）

「わぁ…大きな背中だなぁ…」

リュウの背中を洗い始めるが、いかんせん背中面積が広いため時間がかかっていた。

ゴシゴシ…ゴシゴシ…

タケト

「もうちょっとだからね、リュウさん」

リュウ

「急がなくてもいいぞ、ゆっくりやってくれば、それでいい」

三分後…

バシャー！

タケトはリュウの背中に水をかけていた。

タケト

「終わりだよ！」

リュウ

「ありがとう、次は俺の番だな」

タケト

「やった！嬉しいなあ！」

リュウ

「さあ、背中を俺に向けてくれ」

タケト

「うん！」

タケト

「気持ちよかった！ありがとう、リュウさん！」

リュウ

「ああ、そろそろ上がるうか」

タケト

「そっだね」

浴場からでる時二人は頭を洗い忘れていた事に気が付き、洗ってから

浴場を出た。

零さん

「二人とも気持ち良かったかい？」

番台をしていた零が、浴場から上がって来た二人に声をかけた。

リュウ

「とても気持ち良かったよ」

体を拭きながら答えた。

タケト

「リュウさんに背中流してもらったんだよ！」

零さん

「それはよかったなあ、二人とも牛乳飲むかい？」

リュウ

「いいのか？」

零さん

「ああ、勿論さ！」

リュウ

「なら、是非頂こう」

タケト

「僕も！」

二人の返事を聞くと、冷やしてあった牛乳をクーラーボックスから取り出し手渡した。

リュウ

「ありがとう」

タケト

「頂きまーす！」

ゴク…ゴク…

例の如く二人は腰に手をあてて一気に牛乳を飲み干した。

リュウ

「うまかったよ」

タケト

「ごちそうさま！」

飲み終わった後、いつもの柔道着に着て、三人で雑談をした。

リュウ

「楽しかったよ、また来る」

カウンターに温泉代を置いた。

零さん

「リュウさん、いつも要らないって言ってるじゃないか」

リュウ

「俺もこの温泉に入りに来た客だ、温泉に入った以上払わない訳にはいかん」

零さん

「それじゃあこのお金は貰うよ、また来ておくれよ！」

タケト

「また来てね！」

リュウ

「必ず来るよ」

リュウは風呂屋からでた。

さくら

「暇だなあ……リュウさん、のぼせてないかなあ……心配だなあ……」

ガラガラガラ……

さくら

「あつ！出て来た！いけない、変装、変装つと……」

リュウ

「最後にあそこに行くか……」

リュウはまたでてくくと目的地へと歩きだした。

さくら

「今度は見失わないよ！」

さくらの追跡劇はまだまだ続く…

さくらの追跡劇―第一部―(後書き)

リュウは何処へ行くのでしょうか？

さくらの追跡劇！〜最終部〜（前書き）

更新がかなり遅くなり大変申し訳ありませんでした！

## さくらの追跡劇！〜最終部〜

先程の温泉を出て、リュウは土手を歩いていった。

さくら

「街から出て今度はどこにいくんだろ？」

そう思いながら、リュウの後を変装した姿で距離をとって歩いていた。

リュウ

「少し走るか…」

タッタッタツ…

さくら

「えーっ！？何で走るの!？」

さくらはリュウを追うが、いかんせん早過ぎてなかなか追いつけない。(リュウはジョギング程度だ)

さくら

「ハア…ハア…、散歩じゃないよう！こんなもの…!」  
10分後…

さくら

「やっと…走るの止めたよ…」

そんなさくらを知るよしも無く、リュウは土手を下り、何やらテントが張ってある小屋に向かっていった。

さくら

「今度はなんだろ…?」

さくらは土手の上から様子を見ていた。

リュウ

「おい、銀さん、居るか」

小屋に向かってリュウは言った。

「んお?誰だ?」

返事が帰ってきた。

リュウ

「俺だ、リュウだ!」

「リュウか!よく来てくれたな、入ってくれ。」

リュウは小屋の中の人に招かれ、入っていった。

さくら

「ありゃ?小屋の中に入ったちゃった…こんな所に小屋がある…もしかしてホームレスさんと友達かな…とにかく行ってみようかな」

ささっと小屋の近くに行き、中の話を聞くことにした。

「元気そうだな、リュウ！」

リュウ

「あんたもだ、銀さん」

銀さんと呼ばれた、白髪の五十代の男は答えた。

銀さん

「あつたりめえよ！元気が無けりゃホームレスなんかやってられねえよ」

リュウ

「ふっ、確かにそうだな」

さくら

「やっぱりホームレスさんだったんだ…」

リュウ

「銀さん、土産だ」

先程の和菓子屋さんで買ったのが、懐に入れてあった水羊羹が入った箱を銀さんに手渡した。

銀さん

「いつも済まねえな！」

リュウ

「気にするな、俺が勝手に持って来てるだけだ」  
それからしばらく二人は談笑した…

銀さん

「そろそろ行くか？」

リュウ

「ああ、行こうか」

そういうと二人は立ち上がり外に出た。

さくら

「あつ、リュウさんとホームレスさんが出て来た…」

リュウ

「今回は何が欲しいんだ？」

銀さん

「そうだな…テレビがそろそろ欲しいと思っていた所だ！」

さくら

「テレビが欲しい…？電気屋さんでも行くのかなあ…」

10分後…

リュウ

「今日はやけにゴミが多いな」

銀

「ゴミも俺にとっちゃあ宝だな」

銀の小屋から少し離れた所にある、本来はゴミを捨ててはいけ  
ない場所がある。  
だがそこには、決まりを無視して捨てられたゴミが沢山集まっ  
ていた。

さくら

「なるほど…ここならタダってワケだね…」

リュウ

「探し甲斐がありそうだな」

銀さん

「他にも良さそうな物があったら知らせてくれ」

リュウ

「わかった」

銀とリュウはゴミの山に登り、探し始めた。

リュウ

「これはどうだ？」

何やら巨大な長方形の物体を担いで、銀の所にやってきた。

銀さん

「冷蔵庫じゃねえか！ありがてえけど、今は必要ねえなー」

リュウ

「そうか、なら戻してくる」

降ろした冷蔵庫をまた担いで、元にあった場所に戻しにいった。

銀さん

「相変わらずの馬鹿力だなあ……」

時間が経って…

リュウ

「銀さん」

銀さん

「どっしした？」

リュウ

「日が暮れてきた、今回はこの辺でいいだろう」

銀さん

「そうだな！リュウのおかげで、テレビも手に入れたしな」

さくら

「やっと終わるんだね…2時間は此処にいたよ…」

銀さん

「んじゃあ、帰るか！」

リュウ

「ああ」

リュウはテレビを担ぎながら、銀と先程の小屋に戻った。

小屋に到着し、リュウは拾ったテレビをゆっくり銀に指定された場所に置いた。

銀さん

「やっとテレビが見れるよつになるぜ！」

リュウ

「よかつたな、銀さん」

銀さん

「おうよ！礼にメシ作るから食ってけよ！」

リュウ

「すまん、門限に帰らないと怒られる…」

リュウは申し訳なさそうに言った。

銀さん

「そうか、お前さん今、寮生活してるだっけな？」

リュウ

「その通りだ」

銀さん

「まあ、また気が向いた時に来てくれや」

リュウ

「ああ、ではまたな」

銀に別れをつけると小屋から出た。

さくら

「あつ、出て来た！やっと帰宅だね…後は見つからずに帰るだけ…」

帰ろうと土手を歩いてるリュウを再度追跡した。

帰り道

リュウは行きの時の様に走らず帰り道は歩いていた。

さくら

「何で走って、帰らないんだろ……」

そう思った瞬間、リュウは急に立ち止まった。

さくら

「ん？」

リュウ

「そろそろ出て来ても良いんじゃないか？」

さくら

「えっ………!？」

不意のリュウの発言にさくらは戸惑った。

リュウ

「来ないならコチラから行くぞ」

リュウが追い撃ちを掛けた。

さくら

「……………」

隠れていた茂みからひょっこりと顔を出した。

リュウ

「何故こんな事をしたんだ？」

さくら

「いや…えっと…あの…」

さくらの心中を察したのか、リュウは言った。

リュウ

「安心しろ、怒らないから話してくれ」

しばらくの間黙っていたが、リュウの言葉を聞いて口を開いた…

さくら

「毎週日曜日はどこかに行くから…気になって…」

リュウ

「そうか…今回はコイツで許してやる」

ゴッソ！

さくら

「いったあゝい！」

リュウのゲンコツが炸裂した。

リュウ

「軽目にやったんだが…」

タンコブを押さえて悶絶しているさくらを見て呟いた。

さくら

「痛てて…リュウさん、ごめんなさい…」

リュウ

「それが聞きたかった、来週は一緒に行くか？」

さくらの顔に笑顔が浮かんだ。

さくら

「いいの!？」

リュウ

「勿論だ、さあ帰るか!」

さくら

「うんっ!」

二人は早足で寮に向かった…

おまけ

チユン

「失敗した！？そんなんじゃ刑事は務まらないわよ！」

さくら

「目指してないってば……」

チユン

「明日からトレーニングよ！」

さくら

「助けてリユウさん！」

完！

さくらの追跡劇！〜最終部〜（後書き）

次回もお楽しみ！

## ケンの悪夢（前書き）

かなり更新が遅れてしまい申し訳ございませんでした！

## ケンの悪夢

うぎゃー！うぎゃー！！

昏間の病院に産まれて間もない赤ちゃんの泣き声が響いた。

医師「元気な赤ちゃんですねえ！」

イライザ「無事に産まれてくれて良かったわ！」

ケン「ふう…一安心だな」

医師2「ん？妙だな…」

医師3「確かに、初めて見るな…」

ざわざわ…

ケン「どうしたんですか？」

医師2「赤ちゃんの頭を見てください！」

ケンが我が子の頭に目をやると…

ケン「うおっ！？」

赤ちゃんの頭には既に髪の毛がたくさん生えていて、しかも髪型があの「軍人」に酷似していた。

医師「こんな事は初めてです……」

ケン「ハハツ、まさかな……」

イライザ「まあ、立派な髪の毛ね」

ケン「そ、そうだな！」

何か引つ掛かるが、無事イライザは出産を終え、また普段の生活に戻った。

赤ちゃんの名前は「メル」と命名された。

メル五才

〜庭にて〜

メル「ねえパパ！」

ケン「なんだメル？」

メル「僕、スキップが出来るようになったよ！」

ケン「そいつは凄いな！見せてくれよ！」

メル「うん！いくよ」

メルは足に力を入れ、地面を思い切り蹴って踏み出した。

メル「えいつ！！！！」

メルがしたのはスキップでは無く、あの軍人の技、「ニー・バズーカ」そのものだった。

ケン「それスキップじゃねええええ！！！！アイツのアレじゃねえか！！！」

メル「どうしたの？パパ？」

ケン「いいや、なんでもねえよ！俺は家に入るから、友達と遊んできな！」

メル「は〜い！」

メルはケンに言われた通り近くの公園に遊びに行った。

ケン「偶然さ…髪型も動作も…きっと」

ガチャ

イライザ「お帰りなさい、あら？顔色が悪いわよ？」

ケン「大丈夫さ、少しメルと遊び過ぎて疲れただけさ」

イライザ「そう？汗かいてるみたいだから、シャワーでも浴びてスッキリした方がいいと思うわよ」

ケン「ありがとう、そうさせて貰うぜ」

バスルームに向かおうとした時、イライザがケンを呼び止めた。

ケン「なんだ？」

イライザ「大したことじゃないけど、バスルームの壁にヒビがあったからもしかしたら下にタイルの破片が………」

ピクッ！

ケン「ガイル……！？今ガイルって言わなかったかイライザ！？  
「ガイルの破片」がどうのこうのって……！」

イライザ「えっ??？」

ああ……、タイルの破片のこと？

バスルームに落ちてるかもしれないから、気をつけて……！」

イライザ（心中）「ガイルの破片って想像したくないわ……！」

ケン「タ……タイル？」

イライザ「ええ」

ケン（心中）「そ…そうだよな…、イライザがあんないかがわしい言葉（ガイルはいかがわしい言葉ではない！）を口にするワケがないもんな…、疲れてんのかな俺…？」

ケン（心中）「ちょっとリフレッシュが必要かもな…そうだ！」

ケン「なあイライザ」

イライザ「なあに？」

ケン「今度一緒に旅行にでも行かないか？」

イライザ「まあ嬉しいわ！」

どの辺に行くの？」

ケン「そうだなあ…」

スッキリしたいから車ぶっ飛ばしてアメリカ横断なんてどうだ！」

イライザ「クスツ、ちょっと一体何マイルあると思ってるのよ！」

ピクーン！

ケンは弾かれたようにイライザの両肩を掴んだ。

ケン「何ガイル…？」

ガ…ガイルって！

今、ガイルって!！」

イライザ「キャツ!

落ち着いてケン!」

ケンは我に帰りイライザから離れた。

イライザ「私は「マイル」って言ったのよ…

「何マイル」って

ケン「えっ!？」

マ…マイル…

そうか…すまないイライザ、俺、どうかしてるな…」

イライザ「ううん…

気にしないで、誰だって勘違いくらいするもの…」

イライザ（心中）「ガイル義兄さん（イライザの姉はガイルの奥さ

んです）」とケン、何かあったのかしら?

うーん…重い空気になっちゃった…何か話題は…」

イライザ「テレビでも見ない?」

ケン「そうだな、最近ゆっくり見てないしな」

イライザがそう言うと、二人はソファアに腰掛けた。

ピッ

テレビ「次は、話題のシンガー、エグザイルさんに密着です！」

ピクーン!!!!

ケン「エグザイル…!？」

イライザ「ハッ…!？」

ケン、やめてえー!!

イライザは、ケンのこの後の行動を察して止めたが…

ケン「うおりやああああ!!!」

波動拳っ!!!!!!

ボン!

外に放り投げたテレビを波動拳で木っ端みじんにした。

イライザ「あらら…」

あのテレビ高かったのに…」

ケン「ハア…ハア…」

イライザ「ケン…」

ケン「すまねえイライザ、体が勝手に動いちゃって…」

イライザ「いいのよ!

テレビくらい、また買えば！ ね？」

ピンポン！

イライザ「誰かしら？

今いきまーす！」

ガチャ

春麗（以下チュン）「こんにちは！」

イライザ「あら！春麗さん！

それにリュウさんも！」

リュウ「久しぶりだなイライザ、ケンは何処だ？」

イライザ「ついさつき、自分の部屋に戻ったわ……」

チュン「イライザ、元気なさそうね、どうしたの？」

イライザ「実は……」

イライザは二人に最近のケンのおかしな様子を話した。

リュウ「……………ケンに会ってきてもいいか？」

リュウは重い口を開いて言った。

イライザ「構わないけど、絶対に「ガイル」って言葉は言っちゃダメよ！」

リュウ「ああ、わかった」

リュウはケンの部屋に向かった。

チュン「ケンはリュウに任せて、お茶にしましょう！」

イライザ「でも……」

チュン「大丈夫よ！」

リュウはケンとの付き合いが一番長いんだから！  
信じるのも大事よ？」

イライザ「…そうよね！

信じなくちゃ！」

チュン「それでいいのよ！」

美味しいお菓子買ってきたから食べましょう！」

リュウはケンの部屋の前に居た。

すぐにも扉を開けて入ればいいのだが、部屋の中に居るケンから微塵の「気」も感じなかったためリュウは扉を開けるのを躊躇した。

コンコン！

戸惑いながらも取り合えず扉を叩いてみた。

リュウ「ケン、入っていいか？」

ケン「……………」

返事が無い。

リュウ「…仕方ない、勝手に入るぞ！」

そう言うと扉から少し距離をおいた。

リュウ「波動拳！！！」

バキッ！ベキッ！！

リュウ「イライザ…済まない」

砕け散った扉の破片を見て呟いた。

イライザ「春麗さん！今の音は…！？」

チユン「どっせ、ケンが出て来ないものだからリュウがドアを壊したんじゃない？」

イライザ「そうかしら…」

イライザ（心中）「今度はドアか…  
はあ…」

リュウ「暗いな…明かりは…」

ケンの部屋は明かりがついていなく暗いので、手探りでスイッチを探した。

リュウ「…これが」

カチッ

明かりがついてリュウの目に入ったのは、ベッドの上でうなだれているケンだった。

ケン「…リュウか  
人ん家のドアを壊しやがって…  
ハハッ…」

リュウ「開けないからだ、それよりイライザから聞いたぞ最近様子が変だと」

ケンから覇気がまったく感じられない。

ケン「聞いたか…  
これを見てくれ…」

ケンはリュウにメルの写真を見せた。

リュウ「!?  
そんな馬鹿な…」

ケン「解つただろ?  
俺はどうすればいいんだ!？」

リュウ「落ち着くんだケン!  
単なる偶然だ」

ケン「俺もそう思いたいけど、こんな逆富士山頭なんてアイツしかいねえだろ!？」

リュウは言い返せなかった。

リュウ「わかった、俺がイライザに聞いてくる」

ケン「ま…待てっ…!!」

リュウ「なんだ？」

ケン「心の準備が…」

リュウ「このままずっとイライザとメルに疑問を持ちながら生きていくのか？」

ケン「ありがとうリュウ、おかげで目が覚めたぜ！」

リュウ「そいつは良かった、行ってくるぞ」

ケン「待ってくれ！」

俺がイライザに聞きに行くよ」

リュウ「…そうか、結果が良くても悪くても今まで通り二人を愛してやれよ」

ケン「…ああ」

ケン（心中）「リュウ…ありがとうよ」

ケンは静かにイライザの元に向かった。

ケン「イライザ！話したい事が…！」

ガイル「ん？」

ケン「何で、お前がここに居んだよ！」

ガイル「何を言ってる、ここは俺とイライザの家だ！」

イライザ「ケン…ごめんなさい…！」

メル「パパが二人だー！」

ケンは発狂しそうになった。

ケン「う…嘘だ…」

嘘だろおおおおお！！！！」

ハッ!?

ケン「ハア…ハア…

夢か…最悪だぜ…」

ガイル「ケン、大丈夫か？」

ケン「ぎゃあああああああ…!!」

…  
ケンの断末魔に似た叫び声は合宿所いや、ここら一帯に響いたとか

完

## ケンの悪夢（後書き）

次回は番外編を書こうかなと思っています。

トンネルの向こうは… PART 1 (前書き)

『千と千尋の神隠し』の世界に行く物語です。

ケンとリュウは合宿所から飛び出し、森で修行をしているという設定です。

トンネルの向こうは… PART 1

「せいっ！とりゃー！」

「おっと！てりゃー！」

とある山奥でリュウとケンは拳を交えていた。

リュウ「前より強くなったんじゃないか？」

ケン「へっ！」

毎日プラプラしてる訳じゃねえぜ、いくぜっ！」

ケンはリュウに向かっていく。

リュウ「迎え撃つ！」

ケン「うりゃあああ！！！！」

パンチを繰り出すが、それをリュウが避けて殴り返す。が、ケンも負けじとそれをかわし、パンチの応酬が続いた。

リュウ（心中）「やるな！  
ならば…」

リュウはケンから離れた。

リュウ「波動拳！」

ケンに向かって両手を突き出し、青白い気弾を放った。

ケン「!? そうきたか!

波動拳!」

若干反応が遅れたがケンも波動拳を放ち、相殺した。

リュウ「相殺するとは…!」

ケン「お前の専売特許じゃねえぜ!」

リュウ「ふっ、面白い!

今度は俺から行くぞ!」

ダッ!

リュウは勢いよくケンに向かって走り出したが…

ケン「ストップ!!!!」

ゴテン!

ケンがいきなり止めてしまったので、勢い余ってリュウは転んでしまった。

リュウ「なんだ?」

ケン「すまねえけど、小便してくるぜ」

リュウ「まったく…」

俺はここで待つから、急がなくていいぞ」

リュウはそう言うと側にあつた木にもたれて座つた。

ケン「頑張つて小便してくるよ」

リュウ「ああ」

リュウ（心中）「頑張る…？」

ケン「ここでいいか…」

リュウの居た場所から少し離れた場所に来た。

ケン「さて…チャツチャと済みますか…」

用を足そうとした時、ケンは何かを感じた。

ケン「ん？何だこの感じ…」

あっちから感じやがる、行ってみるか！」

小便の事を忘れ、何かを感じる方へ向かった。

ケン「トンネル…？」

この奥から何かを感じるぜ…！」

ケンの目の前にあるトンネルから『何か』を感じた。

トンネルはケンが小便をしようとしていた場所から少し離れており、誰も使っていないかったのか、トンネルには苔が生え森と同化していた。

ケン「一旦リュウのところに戻るか…！」

ケン「　　って事があってだな、一緒に来てくれよ！」

リュウに先程のトンネルの事を説明した。

リュウ「森に足を踏み入れた時から感じていたが、結構近場だったんだな」

ケン「気がついてたんだったら言えよ！

まあ、今から行けば何が原因か解ることだ！」

リュウ「そうだな、俺もそのトンネルとやらの興味がある」

ケン「じゃあ決まりだな！」

二人は修行を中断し、あのトンネルに行った。

トンネルの向こうは… PART 1 (後書き)

短くてすみません！

トンネルの向こうは…PART2(前書き)

原作とは違う点がいっぱいあります。

## トンネルの向こうは…PART 2

ケン「到着つと！」

リュウ「これがお前の言っていたトンネルか…  
近くに居るとますます不思議な気を感じる…」

ケン「さて、行くぜ！」

二人はトンネルの中へと入って行った。

ケン「真っ暗だな…  
何か気味が悪いぜ」

リュウ「ああ、だが一本道だから迷う事は無いだろう」

トンネルに入ってから30分くらい歩いているが、中々出口が見えなかった。

ケン「やっぱり引き返すか？」

リュウ「いや、出口は近いぞ…！」

リュウは不思議な気をさつきよりも強く感じたため、出口が近い事が解ったのだ。

ケン「マジかよ!？」

リュウ「ケン、前を見る、光だ…！」

ケン「一体どこに繋がってんだ…！」

速足でトンネルから出た。

リュウ「…此処は？」

ケン「ありゃ？」

俺達や森に居たはずなのに…！」

そんなにトンネルを長い間歩いた訳ではないのに、リュウ達の前は森ではなく町があった。

ケン「俺達、結構深い所にいたよな？」

リュウ「ああ、少なくとも一時間程度では下山出来ない所に居たはずだが…！」

錆びたトンネルの向こうには森ではなく、異質な感じがする町に繋がっていた。

リュウ「町だというのに人の気配がしない…」

ケン「ああ、確かに全く感じねえぜ…」

それより、トイレに行ってきていいか？」

リュウ「まだしてなかったのか？」

ケン「あのトンネルの事で頭がいっぱいだっただよ」

リュウ「まったく…」

こちらで待っているから早く行ってこい、得体の知れない所ではなるべく一人にならない方がいいからな」

ケン「了解だせ！

んじゃ行ってくるわ！」

リュウ「取り合えず座るか…」

近くにあったベンチに座った。

リュウ（心中）「さっきから見られている気がするが…  
気のせいか…!?!」

リュウ「考えても仕方がないか…」

ケン「トイレは何処だ!?!」

ケンは商店街らしき所でトイレを探していた。

ケン「まったく、あると見たらメシ屋だけじゃねえか!  
客も居ねえし、店員も居ないってどーいう事なんだよ…!」

結局、人が居ないのを良いことに建物の壁に小便をした。

ケン「スッキリしたぜ〜!

リュウには悪いけど、ちよっと見て回るか!」

リュウはケンを待ち続けていた。

リュウ「眠たくなってきたな…  
アイツが帰ってくるまで寝るか…」

ベンチに横たわり眠りについた…

ケン「本当にメシ屋ばかりだぜ！  
相変わらず人気はねえし…」

まだ、ケンは商店街をウロウロしていた。

ケン「ったく…ん？」

飲食店とは違う建物を見つけた。

ケン「やたらとデケエな、ホテルか？  
しかも、橋まで架かってやがる」

ケンが橋に足を踏み入れようとした時…

「その橋を渡るな！！！」

背後から声が聞こえた。

ケン「うおっ！？」

突然の大きな声にケンは驚いた。

「なぜここに居る？」

ケン「ちよつと待て！

いきなりなんだ、テメエは！」

「私は『ハク』という者だ」

小柄で異質な気を放つ少年が答えた。

ケン（心中）「ハク…？」

コイツ、俺に気配を感じさせずに近づいて来たな…  
何者だ…？」

ハク「何を考えているかは知らないが、この橋を渡るうとはするな」

ケン「へっ！」

俺は他人に指図されるのは嫌な性分なんでね！」

ケンは突然現れたハクの制止を無視して、橋の先にある巨大な建物に向かった。

ハク「愚か者が…」

「あ、あのお」

リュウ「……………」

「起きてくれませんか…?」

一人の幼い少女がリュウを起こそうと必死になっていた。

リュウ「ん…」

「どうしても起きてくれない…  
お話をしたいのに…」

幼女がリュウの顔をまじまじと見ていると、リュウがいきなり目を  
覚まし、幼女に向かって構えた。

リュウ「誰だ!？」

「わっ!？」

リュウ(心中)「女…?  
かなり幼いが…」

リュウは幼女を見続けた。

「起こしてごめんなさいっ!」

リュウ「起こした…?あれは君の声だったのか、夢かと思った」

「一つ聞いていいですか…?」

リュウ「なんだ?」

「あなたは人間ですよね…?」

幼女の質問の意味がイマイチ理解出来なかった。

リュウ「見ての通り人間だが…」

幼女はそう聞いた途端とても嬉しそうな顔をした。

「よかった！

あなたも人間なんですね！」

リュウ「済まないが、どういふことが説明してくれないか？」

「解りました」

幼女の名前は『荻野 千尋』といい、両親がこの世界で豚に変身させられ、両親を取り返そうとある所で働いているということをお話した。

リュウ「なるほど…」

やはりこの世界は普通じゃないな」

千尋「あなたの名前は…？」

リュウ「言い忘れていたな俺はリュウだ、敬語は要らないぞ」

千尋「わかった！よろしくね！

リュウさん！」

リュウ「ああ！

ところで金髪の男を見なかったか？」

千尋「見てないよ」

リュウ「うむ…」

こんな所に居ていいのか？」

千尋「今日はお休みなの！」

散歩してたらリュウを見つけたって訳だよ！」

リュウ「そうか……」

リュウ（心中）「困ったな……」

ケン「近くで見るとますますデケエな！」

ケンは橋を渡り終え、巨大な建物の入口まで来ていた。

「客かい？ 今は準備中だよ」

ケン（心中）「背後！？ なんだこの気は！？」

ケンは後ろを振り向いた。

「あんた人間だねえ」

バツ！

ケン「波動拳!!」

謎の人物からとっさに距離を離れて波動拳を放った。

ケン「しまった…!! つい…!」

「何が『しまった…!』なんだい？」

ケン（心中）「また背後!? 早過ぎる…!」

「落ち着きな!」

謎の人物は指先から黄色い糸を出し、ケンを束縛した。

ケン「動けねえ!? 何すんだ! テメエ!」

「それはこっちの台詞だよ、因みに、あんたに絡まってるのは並の力じゃ解けないよ」

ケン「生憎、俺のパワーは『並』じゃねえんだああ!」

ケンは全身から『気』を放出し、束縛を解いた。

「人間にしちゃ、やるね…あんた」

ケン「テメエは何者だ!」

「あたしや、この『油屋』を経営してる『湯婆婆』さ」

老婆はそう名乗った。

ケン「ぷっ…」

湯「何がおかしいんだい！」

ケン「玉葱みてえな髪型だな、オイ」

ブチッ！！

湯「あたしの逆鱗に触れたねえ！！

お前達！ この人間を捕まえな！」

ケン「お前達って…！？」

湯婆婆が叫ぶと、油屋から湯婆婆に仕える兵士がやってきた。

湯「逃げれるもんなら逃げてみな！ まあ、無理だろうけどね」

ケン「逃げる？ そんなトロクせえ真似しねえぜ！」

兵士「人間を捕らえろ！」

ケン「ボコボコにしてやるぜっ！」

威勢よく兵士に立ち向かっていった。

バキッ！

兵士A「ぐおっ！」

青蛙「兵士A！  
よくもやったな！」

ピョーン！

ケン「うおっ！？」

ペシッ！

青蛙「プギャー！」

青蛙は橋の下にある川に叩き落とされた。

兵士B「まるで歯がたたない…！」

ケン「テメエら今更気づいたか！ ケンさんを甘く見すぎてたようだな！」

ケン（心中）「…って言ってもこいつら、倒してもウジャウジャ出てきやがる…」

何故か体力は減りやすいし…  
いたちこっちは不利だな…」

兵士C「隙ありっ！！」

バキッ！

兵士の振ったこん棒がケンの頭に当たった。

兵士A「やったか！？」

ケン「へっ！柱の角に頭をぶつけた程度の痛さだぜ！こっちの番だぜ、波動拳！！！」

兵士ABC「ぎゃー！」

兵士D「第七部隊出撃！」

兵士Dの声で油屋からまたもや大勢の兵士が出てきた。

ケン「冗談じゃねえぞ…」

逃げるのは性に合わねえが、体力と気が底を尽きはじめてるぜ…  
仕方ねえか…！」

ケンは大勢の兵士を前にして仁王立ちをした。

兵士E「降伏する気になったか？」

ケン「あ、あれはなんだ!？」

ピッ!

ケンは唐突に空を指差した。

ざわざわ…

兵士E「何か見えるか？」

兵士F「何も無いな…」

兵士G「あ、逃げられた…」

湯「何やってんだい! あんた達! 使えないねえ!」

湯(心中)「見てしまった…」

ケン「ぜえ ぜえ ぜえ…

なんだ此処は… 玉葱ババアは居るし、喋る蛙が居るし、体力と気が減りやすいし…」

ケンは油屋に架かっている橋の下に隠れていた。

ケン「辺りも薄暗くなってきやがった…

ん？ 手の感覚が…って、手が消えかけてるう！？」

手の平を見ると透き通っていた。

ケン「ど…どうすれば…！？」

「身の程を知ったか」

ケン「！？」

リュウ「辺りが暗くなってきたな…」

千尋「いけないっ！」

リュウ「どうしたんだ!？」

なんだ!？ 腕が…消えかかっている!？」

リュウもケン同様に体が消えかけていた。

トンネルの向こうは…PART2(後書き)

感想があったら書いてください！

トンネルの向こうは…PART3 (前書き)

オリジナル要素があります。

### トンネルの向こうは…PART 3

リュウ「くそっ！ こんな所で俺は消えるのか…！？」

ゴソゴソ…

千尋は持っていた布袋の中を手で探っていた。

リュウ「一体何を…？」

千尋「ちょっと待っててね…  
あった！」

布袋から黒い団子を取り出した。

リュウ「それは…？」

千尋「釜爺っていう人に作ってもらったの！  
苦いかもしれないけど食べて！」

リュウ「わかった！」

パクっ！

リュウ（心中）「本当に苦い…  
だが、体が元に戻っていく…」

自分の体が元に戻って、リュウは安心した。

リュウ「ありがとう、助かったよ」

千尋「良かったね！  
でも…」

リュウ「でも…？　なんだ？」

ざわざわ…

「人間か！？」

「二人居るぞ…」

リュウ達の周りには、大勢の住人が集まっていた。

リュウ「そういう事が…

どうすればいいんだ…？」

千尋「あのでっかい建物に行けば、私の知り合いが居るからなんとかなるかも…」

千尋は油屋を指差し、リュウに位置を教えた。

リュウ「あんなに巨大な建物があったとは…」

千尋「早く行こうよ！

私、近道知ってるからそこからなら…!？」

ヒョイ!

リュウが千尋を抱き抱えた。

リュウ「窮屈だろうが我慢してくれ、こうした方がずっと近道だ！」

すたーん!すたーん!

千尋を抱き抱えながら、建物の屋根の上を飛び移りながら油屋に向かった。

千尋(心中)「す、凄い…」

リュウさんって本当に人間…?」

ケン「誰だ!？」

ハク「私だ、随分派手に暴れた様だな」

ケン「おい…」

ハク「なんだ？」

ケン「テメエの仕業か!？」

ケンは透き通った手の平をハクに突き出した。

ハク「ふっ… そなたにそんな事をして私に何の得がある？」

ケン「確かにそうだよなあ…」

ケンはうなだれた。

ハク「… 此処は八百万の神々が集う世界、人間ではこの世界に長居は出来ないだろう…」

ケン「長居できない…?」

ハク「今のそなたの状態になり、やがて消えるということだ」

ケン「くそっ！ 俺はこんな訳の解んねえ世界で死ぬのかよ…」

ハク「『助けてくれ』とは私に頼まないのか？」

ケン「頼んだところでどうにかなんのかよ？」

ハクは含み笑いをし、千尋がリュウに渡したような団子を差し出した。

ケン「ん？」

ハク「コイツを食べれば、人間でもこの世界に残り続けることが出来る」

ケンは少し躊躇したが…

ケン「…貰うぜ」

パクっ！

ケン「ぐあっ！？ 何だこれ！？ マズッ！ 毒でも盛ってじゃねえか！？」

ハク「だが、消えずに済んだらろう？」

ケン「え？」

ケンは自分の手を見た。

ケン「本当だ、元に戻ってやがる…  
ハク、お前に借りが出来ちまったな…」

ケンは初めてハクを名前で呼んだ。

ハク「気にするな、借りが出来たのなら、いつか返してくれればそれでいい」

ケン「…そうだな！」

すたーん！すたーん！

リュウはまだ千尋を抱き抱えながら、油屋に向かっていった。

千尋「リュウさん、疲れてない？」

リュウ「ああ、大丈夫だ、千尋は軽いから助かる」

千尋「よかったあ！

リュウさんのお友達無事だと良いね！」

リュウ「そうだな…

あいつは殺しても死なない奴だから大丈夫だろう」

リュウ（心中）「…とは言ったが、この異世界では何が起こるか解らないからな…」

千尋「…凄い人なんだね」

千尋と会話をしている間に油屋の近くまで来たが、リュウは油屋に架かる橋付近に二つの気を感じた。

リュウ（心中）「一つはケンか…」

もう一つはこの住人か…？」

リュウ「千尋、少し寄り道をしていいか？」

千尋「え？ どうしたの？」

リュウ「あの橋の下に人がいる」

千尋「どうしてわかるの？」

リュウ「俺は人間からでてる『気』を感じることが出来る」

千尋「その『気』が橋の下から感じるってことなの？」

リュウ「そうだ」

千尋「リュウさんのお友達かもしれないし、行ったほうが良いね！」

リュウ「ありがとう」

リュウウ（心中）「ケン……無事でいてくれ……！」

ハク「……………ん？」

ケン「ハク、どうした？」

ハクは、もう真っ黒になった空を見上げて言った。

ハク「……こちらに誰かが向かって来ている、しかも二人だ」

ハク（心中）「一人は千尋だな……」

もう一人は……人間！？」

ケン「顔色が変わったけど、なんかまずいのか？」

ハク「一人は恐らく私の知人だ、そしてもう一人は……………」

ケン「もう一人は？」

ハク「人間だ」

ケン「人間！？」

リュウの顔が脳裏に浮かんだ。

ハク「ふっ、そなたこそ顔色が変わったぞ？」

ケン「な、なんでもねえよ！」

ケン（心中）「いけねえ… リュウのこと忘れてたぜ…」

ケン「しかし、俺は何にも感じねえぜ？」

ハク「先程、湯婆婆の兵士と戦っているのを見てたが、そなたはなかなかの『気』の使い手だな」

ケン「『なかなか』じゃなくて『かなり』だぜ！」

ハク「質問に答えてよう、原因は『気』の使い過ぎと疲れだろう」

ケン「確かに、気もスツカラカンだし、疲れも酷いからな…」

スタツ！

ケン「!？」

ハク「…来たか」

千尋「ハク！」

千尋はリュウから降り、ハクの所に走っていった。

ハク「千尋！ 無事か!？」

千尋「無事だよ！ あの人はリュウさんだよ！」

ハク「そなた、人探しをしているだろうか？」

リュウ「ああ」

リュウ（心中）「此処に来た途端、ケンの気が感じなくなった…？」

ハク「隠れてないで、出て来るがいい」

木に向かって言った。

ケン「黙ってるって言ったじゃねえか！」

ハク「素直に謝れば済む話だろう」

リュウ（心中）「気を消してまで会いたくなかったのか…」

ケン「小便終わった後、ちょっとだけウロウロしてたら、ハクと会ってだな……………」

ケンはこれまでの出来事を洗いざらい話した。

リュウ「…なら仕方がない」

ケン「心配かけて済まねえな」

リュウ「さつきから気になっていたが、君は人間か？人の『気』と、もう一つ別の何かを感じるんだが…」

リュウはハクの方を見て言った。

ハク「…違う、とだけ言っておこう」

リュウ「そうか…」

ハク「因みに、そなた達が『気』を使うのと同じ様に、私は『魔力』といったものを使っている」

千尋「湯婆婆さんも使っているの？」

ハク「勿論だ、だが私の魔力では比にならないほどの膨大な魔力を  
あの方はもっている」

千尋「湯婆婆さんてやっぱり凄いんだね」

ケン「なあ……」

ケンが辺りを見渡しながら言った。

ハク「なんだ？」

ケン「もう薄暗いどころか真っ暗だし、出口まで案内してくれねえか？

忘れちゃってさあ」

千尋「帰っちゃうの？

残念だなあ……」

ケン「俺達と一緒に帰らないのか？」

千尋「うん……理由があって帰れないんだ……」

千尋は悲しそうな顔をした。

ハク（心中）「千尋……」

ケン「俺、悪いこと聞いたちゃったかな……？」

千尋「気にしないで！」

ハク「……そなた達は帰れない」

リュウ&ケン「なんだって!？」

ハク「教えるがまず、そなた達の名を聞きたい」

ケン「そついやまだ自己紹介してなかったな!

俺はケン! よろしくな!」

リュウ「俺はリュウだ」

ハク「ケンにリュウか…

私はハク、こつちが千尋だ」

千尋「よろしくね!」

ケン「さあ、話してくれ! 俺達が帰れない訳を…!」

ハク「最初に言っておくがケン、そなたが原因なのだぞ」

リュウ「……………」

リュウはケンを軽く睨んだ。

ケン「おいおいおい! リュウ、睨むなっ!」

ハク「先程、ケンがこの上の橋で湯婆婆の兵士相手に対抗したから目をつけられてもおかしくないだろう。

そして、出口には魔力で外に出れない様に結界が張ってあるに違いない」

リュウ「湯婆婆… さっきケンの話に出てきた魔法使いか…」

ハク「左様、並の魔力ならともかく、湯婆婆の魔力で張られた結界は絶対に破れない」

ケン「くそっ！ あの玉葱ババアが！」

千尋「ハク… ケンさんとリュウさんはどうすれば…」

心配そうな目でハクを見た。

ハク「この世界で生きるには職を持たなければならない、そうなる  
と湯婆婆に懇願してこの『油屋』で働く他ないだろう」

ケン「俺は玉葱ババアの下で絶対働かねえぞ！！！」

リュウ「働かなければどうなるんだ？」

ハク「湯婆婆に能無しと見做されて、動物に変えられる」

ケン「闘ってる時、喋る蛙がいたぞ？」

ハク「奴は元々だ」

千尋「私も一緒に行くから湯婆婆さんをお願いしに行こうよー！」

リュウ「郷に入っては郷に従えか…  
俺は賛成だが…」

リュウはケンに目をやると、頭を抱えて必死に考えていた。

ケン「うーん 玉葱ババアの下で働くか、動物になるか…  
人生最悪の選択だぜ…」

千尋「ケンさん、どうしたの？」

ケン「迷ってたんだよ… 千尋ちゃん、俺はどっちを選ぶべきなんだ？」

千尋は少し考えて答えた。

千尋「湯婆婆さんの下で働いた方がいいと思うよ！ ちゃんと真面目に働いてたら湯婆婆さんの気が変わるかもしれないよ？  
一緒に頑張ろうよ！」

千尋は現に油屋で真面目に働いていた為、説得力があった。

ケン「千尋ちゃんがそう言うなら働くか！」

ケンは千尋に見事に説き伏せられた。

リュウ「ありがとう千尋、俺が説得する手間が省けたよ」

千尋「えへへ、本当のことを言ったただだよ！」

ハク「…そろそろ行くか、ついて来てくれ」

ハク達は橋を渡り油屋に入った。

ケン「スゲエ広いな…」

リュウ「建物の雰囲気は日本に似ているな…」

油屋の内装はエレベーターなど近代的な施設があり、極彩色の純日本的な建築となっていた。

リュウ「ハク、ここは何をしている所なんだ？」

ハク「油屋は温泉施設だ」

ケン「こっちに誰か来るぜ」

「ハク様あー！」

蛙の容姿で、油屋の作業着を着た従業員が向かってきた。

ハク「何用だ？」

従業員「その者たちは人間ではありませんか！ 一人見たことありますか…」

ハク「今日からここで働くことになるかもしれんから色々教えてやるんだ」

従業員「働く！？ 一人でも嫌なのに…」

ハク「何か言ったか…？」

ギロツ！

ハクは従業員を鋭く睨みつけた。

ビクッ！

従業員「い、いえ！ 何でもございません！  
では失礼しますっ！」

ササッ！

従業員はハクの前から逃げるように去っていった。

ケン「あいつ、嫌な感じだぜ」

ハク「済まない… 此処の者達は人間を毛嫌いする癖があつてな」

リュウ「ハク、君が謝ることはないさ」

ケン「リュウの言う通りだぜ！」

ハク「そうか…」

千尋「エレベーター来たよ！」

ハク達はエレベーターに入った、それに続き他の客達も入ってきた。

ケン「…おいリュウ、見てみるよあいつ…」

ケンはヒヨコの容姿をした客らしき人物を指差した。

リュウ（小声）「止めておけ」

千尋（小声）「そうだよ、怒られるよ…」

ケン（小声）「へいへい」

ピンポーン！

エレベーターが開き、ハク達以外の客は出ていった。

リュウ「俺達は出なくていいのか？」

ハク「この階は宴会場だ、私たちが行くのは湯婆婆がいる最上階だ」

リュウ「言われてみれば、上から強い『魔力』というやつを感じるな…」

ガシャン！

エレベーターは閉まり、再び動き出した。

ピンポン！

千尋「…着いたね」

ハク達はエレベーターを出た。

トンネルの向こうは…PART3(後書き)

PV10000を超えました!

トンネルの向こうは…PART 4 (前書き)

ケンが大変なことになります。

## トンネルの向こうは…PART 4

ケン「雰囲気ガラッと変わったな…」

先程の宴会場と違い、物音一つ無く、辺りからは冷気が漂っていて、ただ目の前に巨大な扉があるだけだった。

リュウ「でかい…！ ハク、この扉を開けるのか…？」

ハク「リュウ、開けてみるか？」

リュウをからかう様に言った。

リュウ「そうだな、やってみるか…！」

ケン「俺も手伝うぜ！」

千尋（小声）「普通じゃ開かないんでしょ？  
意地悪しちゃダメだよ…」

ハク（小声）「リュウ達が普通に見えるか…？」

千尋（小声）「……………見えない」

ケン「こんなドアこじ開けてやるぜ！」

リュウ「『せーの』でいくぞ！」

ケン「おうよー！！」

せーの！！！！

二人は勢いよく扉を押した。

ケン「びくともしねえだと…！？」

リュウ（心中）「ただ頑丈なだけじゃ無いな…

この扉から魔力を感じる… それなら！」

リュウ「ケン！ 気を最大限にするんだ！」

ケン「せっかく回復してきたのに何だつてんだ！」

リュウ「この扉には恐らく魔力が込められている！」

ケン「なるほど！ こうなりゃヤケだ、やってやるぜ！」

ハク（心中）「気が付いたか…！」

再度二人は扉を押した。

ギギツ…

さっきとは違い、扉が少し動いた。

リュウ「やはりそうだったか！」

ケン「一気に開けるぜ！」

ボワツ！！！！

二人は『気』をもっと強めた。

ハク「物凄い『気』だ…」

千尋「空気がピリピリしてる…」

リュウ&ケン「うおおおおお！」

バンツ！！！！

千尋「開いた！」

ケン「どうだハク！ 俺達に掛ければこんなドア開けるなんて、余裕だぜっ！」

ハク「見事だ… だが、前をしてみる」

ケン「あん？」

開いた扉の先には、また同じ扉があった。

リュウ「まだあるのか…」

ケン「ちっ！ またさっきと同じように開けてやるぜっ！」

ハク「無理をするな、湯婆婆の部屋までに扉は何重にも設けられている。

私はただ、そなた達の力が見たかっただけだ」

ケン「やってくれるぜ」

リュウ「それでは、後の扉はどうする？」

ハク「こつするのさ」

ハクは扉に手の平を押し付け、魔力を放った。

バンッ！！！！

二人掛かりでやっと開けた扉が簡単に開いた。

リュウ「凄い…！！」

ケン「全部開きやがったぜ…」

ハク「進むぞ」

千尋（心中）「たしか私は湯婆婆さんに引き寄せられて部屋に行っ  
たんだっけ…  
またそうだったりして…」

リュウ「千尋？ 何を考え込んでいるんだ？」

千尋「何でもないよ、リュウさん」

リュウ「そうか、なら良いが」

湯婆婆「ハクが人間を連れてきたみたいだね… それも二人」

湯婆婆は隣に居る三体の頭かしらに話す。

頭A「おい（はい、そのようぞで）」

湯婆婆「あんた達に言っても解りやしないね…」

頭ABC「おい…（酷い…）」

湯婆婆「あたしゃ待つのは嫌いだからね、さっさと来てもらおうかねえ」

クイツ!

湯婆婆は人差し指に魔力を込め自分の方へと曲げた。

頭B「おい…!?!? (湯婆婆さまが魔力をつ!?!?)」

ケン「んじゃ、行「じげ」って、うおっ!?!?」

リュウ「な、何だ!?!?」

リュウ達は何かに体を引き寄せられて扉を次々と抜けていく。

千尋(心中)「や、やっばっばっ!?!?」

ハク「……………」

最後の扉を前にすると、体がピタリと止まった。

ケン「部屋には自分の足で来いつてか？」

リュウ「何があるが解らん… 気をつけるよ、ケン」

ケン「りょくかい」

ハク「私の後に続いてくれ、くれぐれも無礼の無いようにな」

千尋「うん！」

ハクが湯婆婆の部屋に入る… それに続きリュウ達も入っていく。

湯婆婆の部屋は美しい洋風の建築様式で、洒落た小物が所々に置いてあった。

ケン「あいつ、良い所に住んでやがるなあ」

千尋「あれ？ 湯婆婆さんがいないよ…？」

リュウ「急に気配が消えたが…」

ハク「何処かに出掛けてらっしゃるのだろう」

湯婆婆の不在について話していると、正面の机の裏から二体の頭が

現れた。

頭C「おい（やはり人間か、よく来たな）」

千尋「こんばんは！ 頭さん！」

ケン「何だあ？ このふざけた奴は？」

頭A「おい！？（ふざけた奴だとっ！？）」

頭達はケンの言葉に怒り、ケンの周りをぐるぐると回った。

頭ABC「おい！ おい！ おい！（訂正しろ！ 言い直せ！ そして帰れ！）」

千尋「ケンさん、謝った方が良いよ… 怒ってるし」

頭ABC「おい！ おい！ おい！（その通りだ！ 謝れ！ さつさと詫びろ！）」

怒っている今も頭達はケンの周りをぐるぐる回っている。

ケン「ぐるぐるぐるぐる… 回るんじゃねえええええよ！！！」

ケンは三体の内の一体をサッカーボールみたいに壁に向けて蹴り飛ばした。

頭A「おい！？（ぐはっ！？）」

そしてそのまま壁に激突し、気絶した。

頭B「おい！（頭A）」

頭C「おい！（許さん！ 頭タツクル！）」

頭Cは器用にジャンプしてケンに体当たりを仕掛けた。

ケン「ハハハツ！ ざまあみ… ぶぎゃあ！？」

頭C「おい！（調子に乗るな！）」

ケン「ほう… てめえもシュートを決められたいか！」

頭Cに蹴りを食らわそうとした瞬間…

湯婆婆「止めな！」

湯婆婆がケンを制止した。

ケン「げっ！？ 帰ってきやがった！」

湯「帰ってきて何が悪いんだい？ あたしの部屋だよ此処は…っつて  
あんたはさっきの人間だねえ！」

ハク（心中）「マズイ…！」

ハクはケンと湯婆婆の間に割って入った。

ハク「湯婆婆様、この二人の人間はかつての千尋と同じように職を欲しています」

湯「アツハツハツハツ！ 話だけは聞いてやろうかねえ…  
頭！ あんた達は下がりな！」

頭B「おい…！（しかし湯婆婆様…！）」

頭C「おい…（このまま人間に舐められたままでは…）」

湯「あたしの言うことが聞けないってのかい！？」

頭BC「…おい（解りました）」

頭BCは気絶している頭Aを押し運びながら机の裏に戻った。

千尋「可愛そうな頭さん達…」

リュウ（心中）「むこうに敵意は無いのか…？」

湯「あんたは初めて見るねえ」

湯婆婆はリュウに近づき、顔をまじまじと見ている。

湯「そつちの金髪よりかは使えそうだねえ」

ケン「んだと!? この玉葱……………」

ハク「ケン!」

湯「玉葱がどうかしたのかい?」

ケン「いや… えっと… ただ食べたいなあ〜って」

湯「玉葱は体に良いからねえ、好きなだけ食いな!」

ポトポトポトポト!

湯婆婆の魔法でケンの頭上から大量の玉葱が降ってきた。

ケン「いてえ! いたたたっ! この玉葱、無駄にデケエじゃねえか!」

千尋「ぷっ」

ケン「今笑ったな!?!」

千尋「笑って… ククツ… 無いよ!」

リュウ「湯婆婆、俺達を雇う気はあるのか?」

湯「本来なら豚にでもして食いたいところなんだがねえ… 人手が足りてないし…」

ハク「なら、この者達を雇うべきです、普通の人間には無い力を持つています」

湯婆婆様の部屋へと続く扉を一つだけですが開けた者達です」

それを聞いた湯婆婆は驚愕した。

湯「何い！？ あの扉を開いただってえ！？ ホントかい！？」

リュウ「本当だ」

ハク「さあ、湯婆婆様どうします？」

湯「雇ってやるよ、だがそこの鉢巻きだけだよ」

リュウを指差しながら言った。

一方、ケンと千尋は…

ケン「待ちやがれー！」

千尋「キヤー！ 許してよー！」

頭BC「おい…（うつるさ…）」

机の周りをぐるぐる回っていた…

ハク「何故です？ 湯婆婆様」

湯「気に入らないからさ」

リュウ（心中）「解らん事も無いが、このままではマズいな…」

リュウは無言のままケンに近づいた…

ケン「玉葱食わせてやるぜ！」

千尋「私、玉葱嫌いなもの！」

ケン「それは良いことを聞いたぜ！ 早く捕まりやが…ういっ！？」

リュウはケンの柔道着を掴んだ。

リュウ「いつまで馬鹿をやっているんだ、ハクの所に行ってこい」

千尋「リュウさん、どうしたの？」

リュウ「ケンが豚にされて食われるかもしれんぞ」

ケン「えっ！？ あの婆… 話を着けてやるぜ！」

ケンは急いでハクの所に向かった。

千尋「リュウさんは雇ってもらえたの？」

リュウ「ああ、よく解らんが雇ってくれたようだ」

ケン「俺を雇わないってどういう事だ!？」

ハク「…来たか」

湯「あんたはあたしの兵士を攻撃したし、この素晴らしい髪型を馬鹿にしたから雇う要素0ってワケさ」

ケン「考え直してくれよ！ こんな強くてカッコイイ奴、この世界にはまず居ないぜ？」

湯「ふんっ！ ますます気に入らないねえ！」

ハク（小声）「阿呆が… 下からものを言え」

ケン（小声）「へいへい…」

ケン「何でもするから雇ってくれ… いや、雇って下さい！」  
頭をペコッと下げた。

湯「そこまで言っなら雇ってやらんこともないが… 条件があるよ」

ケン「条件？」

湯「ハク、鉢巻きを呼んできな！」

ハク「はっ！」

ハク「リュウ、湯婆婆が呼んでいる」

リュウ「わかった、今行く」

千尋「私、待ってるね」

千尋（心中）「ケンさん、雇って貰えるといいなあ……」

ハク「連れて参りました」

湯「ハク、あんたは下がりな」

ハク「はっ！」

ハクは命令された通に湯婆婆から離れた場所に移動した。

リュウ「ケン、雇って貰えたのか？」

ケン「それが、条件があるってさ」

湯「良く聞きな！ あたしは本来、こうして雇われに来た奴らから名前の一部を奪って此処で働かせるが、あんた達から名前の一部を奪うと語呂が物凄く悪くなるからねえ……」

湯婆婆は少し間を空け、考えた……

湯（心中）「…………！」

ニタア…

ケン「笑ってやがるぜ…」

湯「人間にしちや危険だからねえ…

名前の代わりにあんた達の力を封印する事にするよ…！」

リュウ「かまわん！」

ケン「まあ… 仕方ねえか…」

湯婆婆は手を挙げると二人の体から青白いものがでてきた。

リュウ「力が抜けていく…？」

ケン「ふらふらしてきたぜ…」

湯「さあて、閉まっておこつかねえ」

二人からでてきた『力』を箱に入れた。

リュウ「これで十分か？」

湯「あんたはね、金髪！ あんたはもう一つ条件があるよ！」

ケン「まだあんのかよ…」

湯「散々、あたしの髪型を馬鹿にしてくれたねえ… あんたも同じ髪型にしてやるよ」

ケン「そ、それだけは止めてくれ…！」

湯「聞く耳持たないよ！」

逃げるケンに魔法を浴びせた。

ケン「何ともねえよな…！」

部屋にあった鏡を見ると…

もさっ

ケン「うわああああ！！！！ 俺のサラサラ金髪が！ もう終わりだ

…」

見事に湯婆婆と同じ髪型になっていた。

ハク「ぷっ」

リュウ（心中）「くくっ… 腹が…」

千尋「凄い叫び声がしたけど大丈夫！？」

リュウ「あれを… ククッ… 見るんだ…」

千尋「え？ ケンさんがどうかし…アハハハハッ！」

千尋は笑い転げた。

ケン「これで、良いだろ… 雇ってくれ…」

湯「約束は約束だからねえ、雇ってやるさ」

リュウ「良かったな… ククッ…ケン」

ケン「ちくしょう…」

こうしてケンとリュウは油屋で働くことになった。

トンネルの向こうは…PART 4 (後書き)

感想お待ちしています。

トンネルの向こうは…PART5(前書き)

この話まだまだ続きそうなのでどうかお付き合いください。

## トンネルの向こうは…PART 5

湯婆婆とハクは、リュウとケンをどこで働かすかを話し合っていた。

湯「面倒だから二人まとめて便所掃除で良いかねえ」

ハク「良いわけないでしょう」

湯「だったらあんた、良い考えがあるのかい？」

ハク「勿論です、リュウはボイラー室、ケンは千尋と働かせるというのはどうでしょう？」

湯「…理由は？」

ハク「今ボイラー室ではススワタリが不足しているのでリュウをそこに置き、ケンには精神修行として床拭き、風呂磨きなどが出来る千尋の職場に置く事によって、湯婆婆さまには害のない人間になるでしょう」

湯婆婆はハクの長い説明に眉を寄せた。

湯「…気に入らないけどそうした方が良さそうだねえ、あんたに鉢巻きと金髪の事を任せるよ」

ハク「ありがとうございます」

湯「…しかし あいつらが不祥事を起こした場合は、連帯責任とし

てあんたも八つ裂きだからね、良く覚えておきな」

ハク「はい、解りました… それでは失礼します」

ハクは湯婆婆に深く頭を下げ、部屋の外で待たせてあるリュウ達のもとに向かった。

ハク「…待たせたな」

千尋「ハク、どうだった？」

ハク「一人、千尋の職場に新しい仲間が出来るぞ」

千尋「本当！？ やったあ！」

千尋はその場でジャンプして喜んだ。

ケン「一人って事はもう一人は違う所で働くって事だな？」

ハク「そうだ、湯婆婆と話し合った結果、リュウはボイラー室、ケ

ンは千尋と一緒に働く事になった」

リュウ「ケン達とは働けないのか… 残念だな…」

千尋「職場は違うけど、お互い頑張ろうよ！」

リュウ「ああ、そうだな！」

ケン「ハク、今日から働くのか？」

素朴な疑問をハクにぶつけた。

ハク「いや、今日は挨拶をして仕事の説明を聞くだけで良い」

ケン「よし！ じゃあ行こうぜ！」

ハク「そうだな」

ハク達はエレベーターを降り、初めの階に戻った。

ハク「千尋の職場の従業員がいないな…」

千尋「休憩中じゃないかな？」

ハク「…そうだな、寮に行ってみるか」

ハク達は従業員が寝泊まりする寮の前に来ていた。

千尋（心中）「リンさんいるかなあ……」

ハク「邪魔するぞ」

ハクは扉を開けた。

女従業員A「でさあ、私言っただのよ！」

女従業員B「うんうん、それで？」

女従業員A「私はアンタに興味は無いつて……え!？」

女従業員B「どうしたの?……ハク様あ!？」

先程まで騒がしかった寮内は、ハクが入ってきた事によって静まりかえった。

女従業員C「な…なんのご用で…」

リュウ（心中）「ハクを恐れている…？」

ハク「大した用ではないが、千尋に続き新しく人間が此処で働く事になったので……………」

Bannon!!!

「スッキリしたあ！ トイレ空いたぞって……………ハク！？ それに千尋と人間二人！？」

扉が勢い良く開き一人の女性が入ってきた。

千尋（心中）「居ないと思ったらトイレに行ってたんだね…」

ハク「リンか…」

リュウ（心中）「人間じゃないな…」

リン「何しに来たのさ！…」

ケン「まあまあ落ち着けて」

ケンはリンを宥めた。

リン「アンタ誰だよ！」

ケン「今日から此処で働く事になったケンだ！」

リン「え！？ 千尋、ホントなのかよ!？」

千尋「ホントだよ！」

リン「あちゃ〜 こりゃまた忙しくなりそうだけ……」

リンは頭を抱えた。

千尋「リンさん、ハクの隣に居る人はリュウさんだよ！」

リン「リュウ……!？」

リュウ「職場は違つがよろしく頼む」

リン（心中）「アタイの好みじゃねえか… カッコイイ……」

ケン「こいつ大丈夫か？ 動かねえけど…」

千尋「リンさん！」

パンパン！

千尋はリンの頬つぺたを軽く叩いた。

リン「はっ！？ アタイはリンです！ ……こちらこそよろしくお願ひしますっ！」

リュウ「敬語はよしてくれ、普段通りで良い」

リン「解りましたじゃなくて………わかった！」

千尋（心中）「変なリンさん……」

ハク「挨拶は済んだな」

ケン「おう…！」

ハク「仕事の説明は後でリンに聞いてくれ」

リン「何でアタイがこんな金髪に……」

リン（心中）「リュウさんと仕事がしたいってのに……」

ケン「金髪で悪かったな！」

リン「ああ悪いとも！ 黒色に染めやがれ！」

ケン「んだとお！？」

千尋「やめなよ二人とも！」

ケン&リン「ふんっ！」

ハク（心中）「先が思いやられるな…」

リュウ「ハク、俺の職場も見に行きたいんだが…」

ハク「そうだな、済まないリュウ、ケンそなたはどうする？」

ケン「俺？ 勿論ついていくぜ！」

千尋「私も行く！」

リン「アタイも！」

ケン「え？」

ケンと千尋はリンの方を見た。

千尋「リンさん、仕事は…？」

ケン「そうだが、何でお前が来るんだよ！」

リン「な…何でって、ほ…ほら！ 案内役がいるだろ！？」

リン（心中）「リュウさんが行くからって恥ずかしくて言えねえよ…」

リンがモジモジしているとケンが側に来て言った。

ケン（小声）「さてはお前、リュウの事が好きになっただら？」

リン（小声）「な、何言っただよ…！」

ケン（小声）「でも、あいつ鈍感だから苦労するぜ？」

リン（小声）「う、うるせーよ」

リュウ「ケン、俺はリンに来てもらった方がいいと思っただが…」

ケン「そうだな！ 案内役は多い方が良くからな！」

ケンはリンに向かってウィンクをした。

リン「お…お前…！」

ケン（小声）「頑張れよ…！！ まあ無理だと思うけどな！」

リン（小声）「一言余計だっつーの」

女従業員D「リン！ 仕事はどうすんのよー！」

リン（小声）「ハク、何とかしてくれよ」

リンはハクをじっと見つめた。

ハク（小声）「…仕方ない今回だけだぞ」

リン（小声）「ありがとよ！」

ハク「リンを借りてもいいか？」

女従業員達に言った。

女従業員B「どうぞ！ 好きに持って行ってください！」

リン「お前なあ…」

女従業員B「冗談だよ！ 急いで戻って来なくてもいいからね！」

女従業員A「アンタの穴はあたしらで埋めてやるよ！」

リン（心中）「なんか悪いなあ…」

ハク「…それでは皆行くぞ」

寮からリュウ達は出ていくが、ハクだけ残っていた。

女従業員C「…どうかなさいましたか？」

ハク「休憩時間を裂いて悪かった、もう30分休んでくれ、監督には『ハクが言っていた』とでも言ってくれ」

女従業員D「30分！？いつもの倍ですよ？」

ハク「かまわん」

女従業員達「ありがとうございます！」

ハク「…それでは失礼する」

パタン

ハクは静かに扉を閉めて外に出た。

女従業員A「…ハク様って良いお方ねえ」

女従業員B「ちょっと誤解してたかも…」

千尋「ハク、何してたの？」

ハク「仕事の指示をしていたただけだ。  
皆、私に掴まってくれ」

ケン「なんでだ？」

ハク「歩いて行くより、私の魔力で行った方が断然速いからだ」

ケン「なるほど、便利だな魔力つてのは」

千尋「私も使えたらいいのにね」

ケン「ハハツ、違いねえな！」

ハク「無駄話は後だ、さあ早く」

ギョツ

リュウ達はハクの服を軽く掴んだが、何故かリンはリュウの柔道着を掴んでいた。

リュウ「…何故俺の胴着を掴んでいるんだ？」

リン「…え？ ハ、ハハツ！ 二人とも白いから間違えちまったぜ  
！」

千尋（心中）「変なリンさん…」

ハクの魔法でボイラー室の前に着いた。

ケン「なんか暑いな…」

リュウ「たしかに暑いな…」

ハク「この中はもつと暑いぞ」

リン「いきなり大勢で押しかけたら釜爺が迷惑するから、アタイが話してくるよ」

リュウ&ケン「釜爺…?」

千尋「ボイラー室を担当している人だよ。  
ねえリンさん、私も行つていい?」

リン「いいぜ、ついてきな!」

二人はボイラー室へと入って行った。

10分後

リン「今、休憩時間に入ったから来いってさ！」

千尋「早く〜！」

二人は扉からヒョコツと顔を出して言った。

ハク「分かった」

ケン「行こうぜ！」

リュウ「ああ！」

三人もボイラー室に入った。

トンネルの向こうは…PART5(後書き)

次回からリユウとケンが働きだします！

## トンネルの向こうは…PART 6

ケン「此处、暑すぎるぜ…」

リュウ「確かに暑いな…　ハク、釜爺とやらは何処に居るんだ？」

リュウは辺りを見渡しながらハクに聞いた。

ハク「あそこだ」

リュウ「まさか千尋とリンの近くに居る蜘蛛の様な奴じゃないだろうな？」

ハク「そのまさかだ」

リン「何こそそしてんだよ、早く釜爺に挨拶しなよ！」

ケン「おう！そっちに行く……………」

釜「止まるんじゃ！！！！」

釜爺の方に行こうとしたケン達を大声で止めた。

ケン「いきなり大声だすんじゃねえよ、妖怪クモ爺が！」

釜「じゃかましいわ！　足元を見てみる！」

リュウ「ん？　何だこの黒い塊は？」

ケン「動いてるぞ…」

ハク「この生き物は『ススワタリ』だ」

ススワタリ達は蟻の様に列を作りながら、壁の下部に出来ている穴に入って行っていく。

釜「この穴に入って休むのさ、くれぐれも踏むなよ、ワシの無二の労働者だからな」

ススワタリ達「釜爺さん… 僕たちの事をそんなふうに思っていてくれたんですね…」

千尋「可愛いでしょ？」

ケン「え？ あ…そ、そうだな！ この黒さがたまらねえな」

リン（心中）「こいつ、可愛いって思って無いな」

ケン達はススワタリ達を踏まない様に注意して跨いだ。

ハク「休憩中に済まない、リンから聞いたと思うが、明日からここで働く人間を紹介したくて来た次第だ」

釜「実はリンと千に聞く前に湯婆婆から聞いてたんじゃ」

ハク「何？ 直接ここに来たのか？」

釜「いや、湯婆婆の使いが来て、ワシに手紙を寄越してきた」

ハク「手紙？ 見せてくれないか」

釜「勿論だ、ホレ」

釜爺はハクに手紙を渡した。

ケン「俺にも見せてくれ！」

千尋「リュウさんは見ないの？」

リュウ「ああ」

ハクが手紙を読み始めた。

手紙「明日からリュウという人間がお前の所に来るから死ぬほどこき使ってやりな

追伸 生意気そうな金髪の間人が来たら石炭もろともボイラーにぶち込みな！

それと、鉢巻に後でアタシの部屋に來いと伝えるように」

リン「ハハハッ！ 生意気そうな金髪の間人だつてさ！ 確かに言えてらあ！」

ケン「あの玉葱ババアめ…！ わざわざ追伸に書くことでもねえだる！」

千尋「ねえハク、後で来いって、リュウさんに何の用があるのかな？」

ハク「私にも解らない、リュウ心当たりはあるか？」

リュウ「全く」

ハク「そうか…」

ハク（心中）「湯婆婆が手紙を書いてまでリュウを呼ぶとは…」

ハクが色々と考えていると釜爺がハクに言った。

釜「もう少しで休憩が終わるんじやが、紹介はまだかの？」

ハク「そうだったな、一応もう一人の方も紹介しておく、ケン、そなたからしてくれ」

ケン「俺からかよ」

ケンはめんどくさそうに言った。

ケン「紹介つっても名前だけ言えばいいんだろ？」

俺はケンだ、よろしくな！」

釜「ああよろしくな、ところで気になってたんだが、そのへあーす  
たいる湯婆婆にそっくりだな」

リン「ダハハハッ！！！」

千尋「アハハハッ！！！」

ハク「くくつ…」

リュウ「くつ…」

その場で笑いが巻き起こった。

ケン「笑うな!!! やつと慣れてきたってのに!!」

釜「自分でやったんじゃないのか？」

ケン「んなワケねえだろ! 魔法でこんなにされたんだよ!!」

リン「ダハハハッ! 息が、息が出来ねえ!」

ケン「うるせえぞ! 黙ってる!」

釜「変なこと聞いて悪かったな、許してくれや」

ケン「つたく…」

ケンはその場にしゃがみ込んだ。

ケン「リュウ、次はお前の番だぜ」

リュウ「あ、ああ…」

リュウは何故かひきつった顔をしていた。

リン「リュウ、どうした？ 鳥肌が立ってんぞ」

千尋「顔色も悪いよ… 大丈夫？」

リュウ「だ、大丈夫だ」

リュウは釜爺を前にしてから急に様子がおかしくなっていた。

ケン（心中）「確かコイツ蜘蛛が苦手だったな… さっきどさくさに紛れて笑ってやがったし、やるか…！」

ケンは怪しげな顔をうかべた。

リュウ「お、俺はリュウだ、明日からよろしく頼む」

釜「おう、よろしくな」

ケン「なあ、リュウ、明日から世話になるんだし、握手ぐらいした方がいいんじゃないかねえか？」

リュウ「握手だと…」

千尋「握手かあ、釜爺は手がいっぱいあるから大変だね！」

釜「ガハハッ！ そうだな！

ほれ、リュウ、握手しようじゃないか！」

釜爺は六本の内の一本の腕をリュウの前に伸ばして握手を求めた。

リュウ「……………」

リュウも腕を釜爺の前に伸ばすが、プルプルと腕が震えていた。

ケン（心中）「クハハッ！ おもしれえ…！」

ケンはニヤニヤした顔でリュウを見ていた。

ハク（小声）「ケン、リュウが蜘蛛を嫌いなのを知っているだろうか？」

隣からいきなりハクに話し掛られてケンは驚いた。

ケン（小声）「何で知ってんだよ！」

ハク（小声）「そなたの顔とリュウの様子を見ればわかる」

ハクはやれやれといった様子だ。

ケン（小声）「でもよお、明日から仕事で毎日顔を合わせなきゃいけないワケだし、このままじゃダメだろ？」

ハク（小声）「たしかにな…」

リュウ「……………」

リュウは今だに腕を震わせながら、握手しようかしないか迷っていた。

釜「具合でも悪いのか？ 此処には薬が沢山あるから飲ませてやる  
うか？」

いつまでたっても握手をしないで様子がおかしいリュウを気遣かって言った。

リュウ「じ、実は……」

リュウは意を決して言った。

リュウ「蜘蛛が嫌いなんだ……」

千尋&リン「え！？」

釜「ガハハッ！ そんなことか！」

釜爺は盛大に笑った。

釜「ちよつとしよつくだが、嫌いならしょうがないな！ 仕事を覚  
えるよりまずワシに慣れることが先だな！」

リュウ「釜爺… ありがとう」

ポンッ

釜爺はリュウの肩に手を置いた。

リュウ「おおおお!？」

釜「あ、すまん! つい、やっちゃまった!」

リュウ「だ、大丈夫だ」

リン「しかしリュウが蜘蛛嫌いって以外だなあ、何で嫌いになったんだ?」

千尋「私も気になるなあ」

リュウ「そんなに知りたいのか?」

千尋「うん!」

リュウは渋々何故蜘蛛が嫌いになったのかを話した。

リュウ「俺が子供の頃、ケンと修行をしている時に蜘蛛が突然俺の柔道着の中に入ってきて体中を這って、最後には俺の顔について何処かに消えた。

それから俺は蜘蛛が嫌いになった、以上だ。」

リン「そりゃ嫌いになるわな」

釜「まあ明日は此処に顔出してくれよ」

リュウ「勿論だ」

ケン「爺さん、休憩時間は大丈夫なのか？」

釜「爺さんつてお前…つて休憩時間過ぎてやがる！ 湯婆婆にどやされちまう！」

ハク「湯婆婆には私から事情を言っておく」

釜「助かるわい」

千尋「じゃあ私達は出よっか？」

リン「そうだな！ 釜爺じゃあな！」

釜「また来いよ！」

釜爺に別れを告げボイラー室を出た。

ハク「今からは別行動だな、リュウ、湯婆婆の部屋の行き方を覚えてるか？」

リュウ「だいたい覚えている」

ハク「なら一人で大丈夫だな」

リン「変な輩に絡まれたらいけないから、アタイも付いてっていいか？」

リン（心中）「これでリュウと二人きりだぜ！」

ハク「別にいいが…」

千尋「じゃあ私も行く！」

リン（心中）「え？ ケン、何とかしてくれ！」

リンは情けない顔でケンを見ている。

ケン（心中）「しょーがねえな…」

ケン「ち、千尋ちゃん、さっき女子寮に行った時、帰り際に女従業員が用があるからまた来てくれって言うってたぜ」

千尋「え？ リンさんじゃなくて、私に？」

ケン「ああ！ 千尋ちゃんにだ！」

千尋「わかった！ じゃあ行って来るね！」

タッタッタ…

千尋は女子寮に向かって走っていった。

ケン（心中）「千尋ちゃん、済まねえ…」

リュウ「リン、俺達も行くか」

リン「おう！」

二人は横に列んで歩きだした。

リン（心中）「ケン、サンキュー！」

リンは振り向き、ウィンクをした。

ケン（心中）「に、似合ねえー…」

ケン「三人とも行ったし俺はどうすれだいいんだ？」

ハク「そうだな… もう用事は済ませたから、男子寮に行くとしよう」

ケン「男子寮か、何か眠たくなってきたし丁度いいぜ」

ハク「…行くか」

こうして三組に別れたリュウ達はそれぞれの目的地を目指すのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5841g/>

---

ストリートファイター達の合宿生活！

2010年10月9日20時19分発行